淫の軍団～甲賀流房中術婬奇譚～

京野美波

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
淫の軍団～甲賀流房中術婬奇譚～

【Ｎコード】
Ｎ０４６６ＪＦ

【作者名】
京野美波

【あらすじ】
新宿歌舞伎町から離れた雑居ビルに集まる奇妙な集団
地下一階、地上１０階建てのビルの様々な住人。昼は堅気、夜になると闇夜に紛れ暗殺、忍び込み、拉致を生業にする集団が有った。
拙い作家の新作。お暇潰しにお願いします。

道満静香の場合（亀頭にタバコと女尻に万年筆）（前書き）

警察もアテに出来ない。権力も無い…。現代の復讐劇はじまります。

道満静香の場合（亀頭にタバコと女尻に万年筆）

新宿歌舞伎町から少し離れた１０階建てのビル。
一階には木の扉に擦りガラス。
五条探偵事務所と書いて有る。
扉の横の壁には古びた看板。
…浮気調査・人探し・飼い犬探し・人殺し以外…
何でも屋なのか探偵なのか…
其の事務所に和服を着た年輩の女性と制服姿の女性が入っていく。
木の扉を入ってスグに右側にエレベーターが設置して有る。
建物に似付かわしく無いエレベーター。
年輩の女性と制服姿の女性がエレベーターに乗り込む。
最新のエレベーターらしく音も静かに三階に着く。
「チン！」
麻実産婦人科医院
三階には産婦人科が入っている。
場所柄、新宿歌舞伎町には産婦人科と泌尿器科は数件ある。
歌舞伎町から離れた産婦人科に来るのは決まって訳アリな客ばかり
「コチラに必要事項を記入下さい。後、健康保険証…無ければ実費になります」
ピンク色の髪と黒髪がナースキャップから出ている．。
「実費でお願いします」
「でしたら御名前、住所は書かなくても良いですよ。後、連絡の付く電話番号は記入下さい。それと…今までの入院歴とアレルギー歴と…」
「木村さま！お入り下さい」
派手なナースが院内に二人しかいない受診者を診察室に通した。

麻美かおり・まだ三十前の女医
「どうされ…暴行されました？」
誰が見てもマスクを取った制服姿の女性の顔は右目は青く腫れ口もとは切れている。
「あの、〇〇組の木津さんから紹介されて先生の所に来たのですが」
・
あら～厄介事、付きね・
「詳しく話はしてもらえるのかな？」
「コクッ」
素直に制服姿の女性は頭を下げた。
「1人トラブル解決の専門の人を呼んで良いですか？」
「先生、その方は？」
「あ～アタシの知人で元刑事の私立探偵です。」「え！刑事！」
「今は退官してタダのオヤジですよ。秘密も守れます。木津さんから私を頼れと言われたんですよね？信じて下さい。」
「はい…」
女医はスマホを取り出し電話を掛けた。
「モシモシ！五条！ウチのクリニックに来て！仕事！面倒事、みたい。早くね！」
「さて上着を脱いで貰えるかな？」
「お母さま？ですよね？待合室でお待ち願いますか？彼女も親には知られたく無い話も有ると思うので…」
「はい…」
「ガチャ」
診察室のドアをあけ女性が出て行った。
「さあ上着を脱いで！」
ゆっくりと制服を脱ぎはじめた。
手首に縄の跡…腕にも…
「ブラも取って貰える？」
恥ずかしそうにブラを外す。

「手をどけて！」
ふるふると震えながら手を胸から外す。
「これは…ヤケドだね…右乳首には…」
ピンク色の乳首の中程、左右に小さな紅い点が見える。
…コレは、針で貫通させられたね。
「カチャッ」
木の玄関ドアが開きヒョロっと長身の優男が婦人科医院に入って来た。
「五条ちゃん！先生、診察中～座ってたら～」
診察室では少女を診察台にうかがしていた。
「アソコの中も調べないと裂傷が有ると其処からウィルスが入ってアソコが使いものに成るわよ。後、性病とかも怖いからね…アタシに任せて」
「其処のベッドに横に成って全裸でね。後、脚は折り曲げて台に乗せてお尻は突き出してね！」
顔を紅くしながら服を脱ぎ捨てパンツを脱ぎ捨てた。
真っ白なパンティでは無くパンツがピッタリと当て嵌まる横の布が厚いパンツ…処女だったんだろう…
縛られてレイプは街のチンピラでも今時はしない。
ましてや乳首に針を刺す行為、明らかに女性が係わっている。
股間の恥骨に有るべき毛は無くなり黒いポツポツとした剃り残しがみえる。
「これは…何かに座るように言われた？」
「さ、三角の木の台に座らされた」
股の大陰唇部分が赤く腫れている。
尻にも鞭の跡が残る。
「チョット沁みるよ…」
ピンセットにガーゼを摘み尻の鞭の跡に消毒液を塗り、抗菌薬を塗る。
「チョット、中を診るよ。」

「ヌプッ」
「イッ」
「少し我慢して～」
「カチャカラカラカラカラ…」
銀色のペリカンの口が膣壁を拡げていく。
・ウッ！ウォッカのニオイ…先に残留精子を吸い取って…先の細長いスポイトで膣内の精子、ウォッカを吸い取る。
精子を調べれば何人が暴行したかは分かる。
「カチン！」
膣の奥で金属音が鳴った。
長いピンセットで金属片を取り出す。
「カチャン！カチン！」
パチンコ玉が数個出て来る。
良く変質者やＳＭ愛好家が使う玩具。
普通は専門の店で疑似パール等を買って使うが彼女を普通の女とは見てない証拠…
「ガチャ！」
「マリ！コレ、検査に廻して！西新宿のラボなら今からでも検査してくれるでしょ！ひとっ走り行ってきて！渡したら今日は良いわ！」
「分かった先生！」
銀色のトランクを渡すと母親らしき中年女性に近づいた。
「分かっている事はお話下さいます？」
「あの子、どうなんですか？」
「ハッキリ言って集団で強制性交渉、後は乳首に針、尻や胸に鞭とタバコを押し付けられてのヤケド、三角木馬に乗せられ大陰唇、皮下出血に両太腿に裂傷…膣内にパチンコ玉が６個ですかね…五条に言って警察官を呼ぶ事も出来ますが…警察沙汰は嫌そうな？」
「え～っと娘さんとは話は？」
「以前から学校から…汚れて帰って来たり…教科書に落書きを…」
・典型的なイジメだな・

「学校には相談は？」
「したのですが…調査するとだけ…」
・私学だから寄付金が多いお嬢様のイジメか…典型的だなぁ・
「で、どうされます？警察沙汰にします？」
「そっ！それは…娘の将来に…」
「あのね！もう娘さんの将来、詰んでますよ！あの手口、暴行の仕方はプロです。多分、映像として保存されてます。後、男達は反社の人間が絡んでますね。このままでは脅され金を取られて娘さんは風俗行きですね。あ！途中で心が壊れるってのも有りますがね」
「え！」
中年女性は鞄から一冊のノートを取り出し五条に渡す。
「カチャ」
五条が丸眼鏡のサングラス部分を上に上げてノートを読み出した。
切れ長の一重の眼、鼻筋が通りモデルのような顔をしている。
元刑事には見えない横顔。
「道満　静香、道満都市開発の娘かぁ～」
「五条！誰それ！」
横から麻美が五条に声を掛ける。
長い髪にウェイブがかかり二重の切れ長の眼が五条を見る。
顔の半分はマスクをして分からないが白衣の下の豊満な乳房からくびれた腹から腰にかけてのラインは白衣の上からでも分かる。
「道満都市開発って名前だけど実際は道満組…関東〇〇会の二次団体。ヤーのフロント企業…公共工事が専門だったけど…」
「夫が県の都市開発部に…」
「あ～組織的だなぁ…確か〇〇県の県庁土木課の発注担当者一家も不審死を遂げたなぁ…一家で無理心中で娘だけ行方不明。警察は娘を探しているが日本にはいないだろ。埋められたか海外の売春窟だな…」
「で…どうします？警察？それとも一家心中？」
「あ！五条、警察は駄目だわ。道満と県警の幹部がズブズブだから」

「治療コースをご説明しますが…聞きますか？」
中年女性は震えながら頷く
「娘さん治療コースは娘さんを治療して引っ越し旦那さんも転職して貰います。この場合、娘さんの動画が流出の可能性は残ります。」
「Bコースは娘さんの治療と動画の回収。動画の回収は道満の娘を拉致し同じような動画撮影をして保険にします。後は転校と転職。ネックは道満組の仕返しですかね？」
「Cコースは根本的治療。道満組の壊滅と道満親子、娘さんを暴行した男達を復讐。壊滅以後は普通の生活が戻ります。」
「あの…家で主人と…」
「話されます？話しても結構ですが警察に相談した時点で娘さんの動画流出、拉致、旦那さんと奥さまは消えますね。なんせ警察と繋がってますから…」
「今は銀行にも…」
「成功報酬制ですので、成功後に…」
「コレにサインと本物の身分証明書を…」
「くれぐれも他言無用で…後、契約不履行は道満が私達に変わると思って下さい…」
「娘さんは暫く入院させますので…治療が全て終わり次第、退院とします。」
「コチラにいらっしゃい。」
「五条！奥さまと今後を詰めてね。」
１０階建てビルの９．１０階が入院病棟に成る。
病室に入るなり少女は女医にしがみつき嘆願した。
「明日、アタシが学校に行かないとカエデが酷い目に逢うの！カエデを助けて！」
「カエデさん？とはどんな関係？」
「道満さんが転校してきて先に眼を付けたのがカエデなの！私はイジメが酷いから間に入ったら今度はアタシがイジメの標的に成って…」

「分かったわ…カエデさんも此の病院に連れて来るから！」
「大人しく寝なさい！」
点滴に混入した睡眠薬が効いたのか少女はスグに寝息を立てた。
「五条！聴いてた？」
「カエデって娘も背景に何か有るのかしら？」
「陳に言って道満の娘とカエデ、後は取り巻きを数人、さらってくるよ」
・町外れファミレス内・
「ヒャッハハハ！これ！流そうぜ！」
「馬鹿！今、流してどうするの？馬鹿タカシ！」
スマホの画面には凌辱される少女が写っていた。
病院に運び込まれた少女。
「カエデ！お金が入ったらアンタは売りから開放したげるわ！明日、アスカが来るように電話しときなさいよ！明日も助平オヤジを呼んで撮影会をするんだから！アスカが来ないとカエデが変わりね！」
「五条さん陳さん聞こえますか？」
「楊、聞こえるよ。兵隊は何人呼んだ？」
「１５人、ワゴン車４台に乗せてます。」
「見た感じ道満の娘、其のチンピラ彼氏とカエデ、後は２人か…他に店内、外に道満の仲間は？」
「其れらしき男はいませんね。」
「道満の娘と男は拉致してビルに、後はカエデも…後の男はリンチして河川敷に裸で縛って放置！」
「後、このバッジを拉致現場に落としておけよ」
「ほら出てきた！」
「行け！拉致は女と其の男！後は河原で袋！」
「ザザッ！キッ！ガラッッ！」
「何だお前らっ！」
真っ黒い土嚢袋を頭に被せ手を後ろに廻して両手親指を結束バントで締め車に乗せ発進させる。

女は抵抗も無く安易に拉致は出来る。
土嚢袋を被せ首まで降りた袋の紐を左右から引っ張ると首が締まり女は大人しく成る。
男の場合は暴れるので先に袋を被せてスグに小指を折る。
大概の男は大人しく成る。
「バタン！キュキュキュキュギューン！」
タイヤから白煙を上げながら急発進させる。
「おい！タカシと女が2人拉致されたぞ！」
「女って道満の娘か！やばい！俺達も逃げるぞ！」
店を出た男達を陳の仲間が拉致をする。
「ほら！でんかい！」
「お前等ン中で女、手籠めにしたのおるんか？」
「手籠め…何ですか？」
「廻してズタボロにしたんか聞いとんや！」
「してません！してません！俺達には女は廻りません。客と道満のオヤジさんです。」
「お前、道満のトコの若いのか？」
「まぁ～ええわ！おい、適度に殴って身包みはいでチンポの先に根性焼きしたれ！」
「ヤベテグダザイ！」
「オモロイもんで挟ンどんな！」
「車にトングが有ったもんで！」
「じゃあ皮付きウインナー焼いたれや！」
ピンクの亀頭にタバコの先が着く。
オレンジ色の火が発光し暗くなる。
「フグググっ」
「後の男達も裸になり根性焼きを見ている」
「うわ！コイツ漏らした！」
「面倒くさ！車にガスバーナー積んでへんか？」
「キャンプ用が有ります。」

「根性焼き辞めてチンコ、バーナーで炙れ！」
男達が河原で裸になりビクビクと引き攣ってる。
「お～忘れんウチにバッジ、置いとけ！」
関西〇〇連合
道満の上の組織と対立中の組織のバッジ。
「カチン！」
「肉の焼ける匂いを嗅いだら肉、喰いたくなったぜ！行くぞ！」
「おい！道満都市開発に電話して河原の男の事を伝えとけ！一般人に警察に通報されたら面倒だわ！」
「はい！」
・道満都市開発社長室・
「あん！あん！あーん！」
「アン、アンしか言わないなこの女、アソコも緩くなったし…やはり女は処女だなぁ…あの少女、締まりが良かったなぁ娘に言って調達させるか…」
「もう！社長！何を言ってるんですか！」
「うるせぇ女だな！」
テーブルに有るペン立てから万年筆を掴むと女の尻に突き刺した。
「ヒギャ！痛ーい！」
「オゥ！突き刺したら締まった！」
「痛ーい！痛ーい！」
「我慢しろよ！もうすぐ発射するからよ！」
「ジリリジリリジリリ…」
「社長！お嬢様の取り巻きの男が河川敷でリンチされ見つかりました。」
「おおかた、喧嘩だろ！」
「その男が言うにはお嬢様が拉致されたと
…後、近くに関西〇〇連合のバッジが落ちていて男達が関西弁との事です。」
「はよ！本家に連絡をいれろ！オマエも！のけ！」

「ドスン！ズブズブッ！」
「ヒギー！」
尻に刺さるペンから床に落ちた女の尻にペンが半分沈み込む！
「おい！この女、組織のソープに沈めとけ！」
「社長！本家の本部長からです。」
「おい！娘が拉致って本当か？」
「娘の取り巻きの半グレを袋にした奴らが関西弁でバッジも落ちてました！」
「おいおい、其れだけで西とは喧嘩は出来ねえぞ！後、その半グレ連中にも敵対勢力はいるよな！ソチラを調べて連絡しろ！」
「グヌヌ…」
西の巨大組織と関東では有名でも組織的にも2倍は有る組織。
武闘派組織も多く本家も枝の経済舎弟の組織の娘がさらわれようが知った事では無い。
「オイ！タカシって奴のトコの幹部、呼んどけ！」
・新宿歌舞伎町の外れ五条探偵事務所・
「陳！こんなトコに入れるなよ！」
「アタシが入れさせたのよ」
女医の麻美が声を掛ける。
「さてと尋問といきますか…」
「カチャカチャとタカシのベルトを緩めはじめた。」
「陳！其の道満の娘も剥いて…」
陳が顔色を変えずに道満の娘の服をナイフで切りはじめた。

尻にハンダコテ～裏切りの代償～

「パン！パン！パン！パン！」
「早く乗れ！」
黒いツナギに黒いフルフェイスヘルメットの男が繁華街に有る消費者金融会社の玄関に銃を向け四発、銃を発射した！
消費者金融会社の従業員には負傷者は居ないが客の肩に一発、弾が当たり負傷した。
昼過ぎの繁華街での銃撃事件。
表向きは西の組織の拠点だったがマスコミにも知れ渡り店は閉める事に成った。
関東に有る１０支店をすべて閉めた。
一般市民が負傷したと言うことで連日、報道はされ西に有る本部事務所にもガサ入れが有った。
商店街での銃撃、何台もの監視カメラに写されている。
犯人は道満都市開発の社員。
スグに道満の上の組織にもガサ入れが行われた。
犯人達は西、東の両方の組織から追われる事に成り警察も組織より早く検挙にうごいた。
「犯人の潜伏先は…」
「個々にいるのにね…」
バン！バン！とテレビを叩く。
「おい！ブラウン管テレビ、叩くなよ！」
「テレビ、液晶に変えたら？」
「ところでこいつ等どうする？」
「あ～五条さんに調べて貰ったら、こいつ等強制性交の罪が２０件以上だから紐切りでは無く、去勢だって…麻美先生が精子の特定してるからピッタリ合ったら小姓牧場に連れて行き去勢するって！」

「あ！電話来た！はい！同じ…じゃあ牧場に連れて行きますね。」
「おっさん！明日からは女の子やわ！穴の穴で自分の手術代、稼ぎや！」
「手術なら芥先生が？」
「しか出来ないでしょう。男の下半身は芥先生。女なら麻美先生。」
「コイツラの親玉は？」
「あ～牧場の１室で近親相姦させてる。」
「エゲツなぁ～」
「後、１人は娘の男。コイツは紐切りにするって」
・・・・牧場内去勢場・・・・
「俺達を誰だと！アグッ！」
「やかましいなぁ」
「ガチャガチャガチャ！」
「せ～の！ズルん！」
「あらぁ～チンコ、埋まって無いわ」
「タマだけだろ！」
「はぐッヒグッ」
「玉袋を上げて・・シワシワな精巣いりの玉の下部の皮を指で上に上げて睾丸の裏の皮をスパッと切る。鋭利なメスなので切られたかどうかは去勢される側は分からない。」
「ヌルン」
真っ白な精巣が袋から飛び出す。
「去勢器具！」
ヤットコの様な器具が渡される。
「カチ」
「押さえてくれよ！」
器具を右に回す。
「ブグッフグッ！」
「ブチっブチブチブチ！」

男は泡を吹き気絶している。
「ズルん」
ヤットコには挟まった精巣と精巣から伸びる紐状の精管が垂れ下がっている。
「次は？おっさんだっけ？未だ、娘とセックスしてるの？」
「今は猿状態ですよ」
「引き剥がしてつれて来て！」
「はフッはフッはっはっはっはっ！」
簡素なベットの上で豚の様な尻が上下している。
中年男の下には黒いマスクをし両手はベッドに縛られている。
股もM字開脚で固定されているが中年男に突かれグッタリとしている。
「パン！」
乗馬用の鞭で男の尻を叩く！
激痛で男は我に帰る。
「何だお前ら！」
「何だって女をあてがってヤラしただろ！」
「ほら！お前のむ・す・め！」
女のマスクを剥がす。
眼をトロンとさせて口からはヨダレを垂れ流している。
「な！なんじゃ！」
「おっさん、若い娘好きだろ！俺達からのプレゼントだよ！」
「女の抱き終いに自分の娘！最高だろ！」
「さぁ男、やめろかぁおっさん！」
「のかんぞ！娘も守る！」
「どうする？」
「此処でするわ！」
「何するんじゃ！」
「去勢だよ！」
垂れた睾丸の後、尻の穴の下と睾丸の皮の間の皮を横にスパッと切

る。
切れ込みに指を入れて真っ白い精巣を出すとヤットコで精巣の付け根の精管をつまり右に回す。
「ギャーウガー！」
「ブチブチブチブチブチブチブチブチブチ」
「やかましいなぁ！ほら娘のパンツ、咥えとけ！」
「バタン！」
「おっさん！気絶したよ！」
「あ？傷口を縫って道に捨てとけ！」
「此の女は？」
「あ～その女は厚さ1センチの処女膜を付けるから病院に連れて行く！」
「1センチ！チンコで破れませんよね。」
「まず日本人には無理。黒人の巨根なら破れるかもね・・・ソイツは香港の黒社会に売る。」
「芥さん！後の男、3人は？」
「あ～沙也加姉さんが紐切りするって！」
・・・・シモ潰しの芥・・・
新宿歌舞伎町外れ雑居ビル芥鍼灸針院
「ほら、入るよね・・・」
「何！するんだよ！」
「パイプカットでは無いしなぁ一生、勃起しなくするのさ！」
「よせ！俺は何もしていない！」
「君さぁ道満の娘に言われてマワシしたよね。後、動画はどうした？」
「無いわよね。売ったから。」
「ほら！あの動画、貴方の恥ずかしい動画も売ったげるから」
透明のシリコンの管、半径が0．5㍉のなかに0．01の細い針を入れている管が亀頭に横に裂けたマヌケ面のような穴から体内に入る。

「スルスル・・・スルスルスル」
シリコンの管をグリグリと動かす。
「ほ～ら元気に成ってきた。」
トウコの豊満な胸元から白い乳房が見える。
「ビクッビクッビクッ！」
怒張したペニスの先から透明な管を出し下半身丸出しでホスト風の男が睨んでいる。
「あら？自分でおっ勃てて怒ってるw！」
「じゃあ起てなくしてアゲル！」
トウコが細い指で透明な管から出ている針を動かす。
「トッ」
男の下半身で鈍い小さな音がした。
シナシナと怒張したペニスが縮んでいく。
「シンジ！女性ホルモン注射！」
「ホイよ！姉貴、もう終わり？」
「紐切りしか頼まれて無いしね。」
手にした注射針が睾丸の精巣に刺さるが下半身に針を刺した痛みは無い。
「はい、終わり。そのチンコはオシッコの為の道具に成りました。」
「あ、ひと月で貴方の股間のペニスは子供大に小さく成り睾丸は消えるから・・・性欲の無いホストってどうなんでしょうね？」
「トウジ！アタシたち新宿の麻美先生に女と去勢したおっさんとインポのホストを渡して来るから！お土産はシュークリームで良い？」
「オッケー！」
「あ！トウジ！留守中に隣町の女の子を連れ込むなよ！オマエ、生でしかしないんだから！」
「仕方ないよ！生でせがむから！後、射精するような名器はいないよ」
「それもそうだな。」
・・・新宿歌舞伎町外れ雑居ビル・・・

「おつかれトウコ、シンジ！おっさん達は？」「一階の五条さんとこ！」
「女は？」
「ほい！」
病院の待合室のソファに放り投げる。
「此の女は？」
「整形外科の小間先生に渡すの。アタシでは処女膜再生手術はしたこと無いから。」
「男達は片付いたぞ！木津さんがワゴンに積んで出て行ったから。」
「あのおっさん、どうなるの？」
「お～シンジ！久しぶりだな。おっさんは関西の組織に渡されて処分か男娼として尻の穴で稼ぐだろ。」
「この女は？」
「この女も分厚い処女膜再生手術をして西に渡す。何か処女と黒人とかで動画を撮るとか・・」
「で！後、誰を待ってるの？」
「依頼者。」
「約束のお金を払って貰わないとね・・・」
「来なければ？」
「？若い女の子を買う組織に売るだけ・・・」
「シビアだね五条さん。」
「昔と違って御主人さまから禄は貰って無いからね。俺らも生活が有る！」
「来ないね。」
「ホント・・・」
「誰の依頼？」
「木津さんが持って来た仕事。」
「入院してる娘は！」
「駄目！いないよ！」
「監視カメラは？」

「駄目！特殊フィルムで加工されてる」
「最初に娘の顔を写真で撮ったよな」
「その道満の娘、起こせ！」
「え～五条さんと麻美先生、やられたの？」
「ふぁ～。」
「パン！バシッ！」
「オマエ、道満の娘だよな！この女、知らないか？」
「アヒャ！ミキじゃん！歌舞伎町のホストクラブ愛羅に入り浸っているよ！」
「親は役所勤めか？」
「北から家出した娘でさぁ～何でもヤラせる変態で有名だよ！」
「おい！陳！お前んトコの兵隊貸してくれ！」
「此の女を拉致して来てくれ！」
「後、木津のおっさんも！」
「どうした？五条さん？」
「木津のおっさんに騙されたよ！」
「へ～俺ら騙すとは度胸有るなぁ～」
「何時以来だっけ騙されたの？」
「家康に信長の暗殺を頼まれた以来だよ！」
「ちょいキャッチ！」
「おう！ミキは捕まえた。ビルの五条さんとこに連れて来てくれ」
「陳！木津のおっさん、東京駅だ！おっさんに付けたＧＰＳが作動した！」
「オウ、ヤン、此のおっさんの拉致、頼むわ」
「ピンポンピンポンピンポンピンポン」
自動改札機の前方トビラが閉まり一旦、出ようと後を向いた途端、後方のトビラも閉まった。
駅員が駆け寄る。
「切符を再度、確認しても宜しいですか？」
「はよしてや！新幹線が出るやろ！」

「申し訳有りません。駅員室で切符を確認します。」
「はよせい！ワシを誰じゃと・・！」
「少し眠って下さい」
駅員の右手に有る銃から麻酔薬が発射された。
「パスッ」
「お客様！お客様！」
「担架！早く！」
他の駅員が担架で駅員室に木津を運ぶ。
ドタドタと駅員室に救急隊員が入って来る。
木津を担架に乗せ駅を出た場所に待機する救急車に乗せ走り出す。
「陳さん、木津っての拉致しました」
「小間美容整形外科に搬送しろ！」
「はい。」
陳飛龍の配下は全員が堅気の仕事についている。
配下は陳でも把握出来ない人数がいる。
地方の下に１０人の部下。
その部下達が各自、配下を持っている。
雑居ビルに連行された木津はビルの地下に有るＳＭクラブ「沙良」に連れ込まれた。
「五条さん！下のクラブに入れました。」
クラブ内には先に捕まった道満静香、グルに成っていたミキがＸ字の磔台に全裸で縛られている。
「あらぁ～男も来たの・・・ウチに来たって拷問で良いのよね！」
「其の台に全裸にして手枷に両足、足枷に両腕を固定されて！」
「ガチャ！」
「あ～頭領！お久しぶり！」
「セイサ！其の言葉は使うな！」
「だって３人とも処分するんでしょ？」
「聞かれたって居なくなるのにねぇ！」
「先に誰からするの？」

「其のおっさんからしてくれ！」
セイサは長い金属棒に柄がプラスチックの棒を持って来た。
棒から出たコードの差し込みプラグが金属棒が何かの道具で有る事を物語っている。
すぼんだ中年男の尻の穴にローションを塗り金属棒を差し込む。
「おじさん、何処の組織の人？」
「なんじゃ！こりゃ！抜け！お前ら殺すぞ！」
「尻にハンダコテを入れられて脅されてもねぇ」
セイサがケラケラと笑った。
「ほら」
ハンダを動かし男の前立腺を刺激する。
性欲に関係無く男の股にある肉棒がムクムクと起き上がりピンと伸びた。
「さぁハリネズミにしようかな・・・」
「イッ」
マチ針を肉棒の亀頭に突き刺す。
「ケラケラケラケラ！ハリネズミと言うよりお裁縫の針山に成った！」
マチ針の尻の色とりどりの丸い玉がピンクの亀頭に無数に突き刺さりカラフルな玉にピンクの亀頭、針が指して滲み出た赤い血がツラツラと肉棒を伝い陰毛に拡がる。
「まだ言わない？」
「もしもし！麻美！眼の前の娘を画面に写して」
耳に当てていたスマホを操作しテレビ電話に変えた。
画面に裸に猿轡をし股をＶ字に広げ拘束された少女が写る。
画面を見た木津が驚く。
「麻美！その子、処女？」
「お嬢様学校だからねぇ・・・処女膜、有ったよ！」
「船は何時？」
「後、６時間後に出るって」

「あの組織、達磨、作るよね」
「あ～逃げない為にね。」
「木津さん！誰の差し金かなぁ～組織の人間なら言わないかぁ。」
「麻美！幾らになる？」
「此の娘で６千、ソッチのヤリマンと道満の娘で一億。」
「其れで今回は終わる？」
「そこのおじさん喋んないしね。」
「木津？まぁ仮名でも良いわ！もう喋んなくて良い！」
「待って！アタシが喋る！」
「計画は道満都市開発の会長、関東〇〇会の幹部の加須が絵図を書いたの。目的はアタシの父から道満都市開発を奪うこと。」
「其れで道満の娘のアンタが何故、加須と木津に使われた？」
「アタシがホストにのめり込んで加須の経営するサラ金から借金したの。」
「で？」
「加須から借金帳消しする代わりに金庫の手形を盗めって！」
「あ～其れを加須が西の木津に売ったと・・・」
「労せずに関東に組を起こす事が出来たと・・・」
「麻美！陳に連絡して加須の娘、孫、姪！誰でも良いわ。女をさらって！」
「ついでに加須も！」
「木津さん？もう要らないわ！」
「カチッ」
セイサがハンダコテの電源を入れた。
数分後、ハンダを差し込んだ尻の穴から白煙が立ち上る！
「むぐーっ！フグッフグッフグッ！」
「お嬢さんも見ておきなよ。父親が尻の穴を焼いて行くとこを・・・・」
道満の娘とミキは木津の拷問を見て気絶している。
・・・まぁ、次に起きたら達磨だけどね・・・

セイサの顔を見て無事だった者はいない。

裏切りの代償～カエデの結末～

裏百地　女子学生無惨

「ガヤガヤガヤ」

「ごきげんよう～」

「ごきげんよう～」

「アカリさん今からバイトなの？」

「あ～北条さん！そうなの！」

「お家の方はお小遣いはくれないの？」

「アタシは・・・自分の社会勉強の為にしてるの！」

「そう。じゃあごきげんよう・・・・」

アカリは夜になると家に来る白髪の男が反社会的勢力の男と知っていた。

マンションには母親と住んでいた。

母親は昼はブティックを経営して夜になると帰って来る。

白髪の男が家に来るとマンションの下に何台も黒い外車が止まりマンション玄関に数人が立っている。

毎週、男が来る日には高校生になりコンビニのバイトをするようにした。

母親は反対したがマンションから１０メートルも離れていない場所に有るコンビニで雇って貰える事に成った。

母親からは何故か聞かれたが男が来た日の夜に聴こえる母親の女の声に性に目覚めてから耐えられなくなった。

「いらっしゃいませ！」

明るい声で返事をするので麻美もニッコリ笑い会釈する。

「少しお待ち下さい」

アカリが女性から踵を返すとコンビニ裏に有るパン等を入れるプラスチックケースを屈んで持とうとした。

「ゴメンネ。貴方には恨みは無いのよ」
右手でアカリの口を塞ぐと手の中に仕込んだ睡眠ガスでアカリは気絶した。
「いや！」
アカリが眼を覚ますと裸にされてワゴン車に載せられ四肢を固定されていた。
ワゴンの後部座席に左右の手はバンサイの型でドアの上の手摺りに縛られ脚は開脚されて同じ手摺りに固定されている。
手を左右に上げ両足はVの字に開き真っ白な下着が胸と股を隠している。
麻美のスマホが鳴った。
「ハイ！コードピーチ！」
「こちらスパイダー！娘の拉致完了！」
「スパイダー！了解！娘は？」
「簡易検査の結果、売り物には成りません。性病、ジャンキー、非処女、スプラッタムービーの女優しか無いですね！」
「ピーチ了解！本妻の娘から初めて！」
・・・チームスパイダー所有車両内・・・・
「なによ！開放しなさいよ！」
スマホで陳が木津を動かしている男に電話をする。
正妻の娘ホナミはアカリとは正反対。
高校中退後に街の不良を仲間にして親の衣をかり好き放題。
薬物販売にボッタクリバー、援助交際の斡旋、拉致等、全ての悪事をして来ている。
男好きなので陳の配下のホストを使い誘い出すとスグに蜘蛛の糸に絡まった。
組事務所内では加須が苛立っていた。
道満も居なくなるし木津には連絡がとれない。
娘二人も昨夜からいない。
ホナミは遊び歩いているのはわかるがアカリが帰宅しないと愛人の

ヤエから連絡が入る。
「ポンポロリン！ポンポロリン！」
何とも滑稽な外国製スマホから着信音が鳴る。
番号はホナミのスマホからになっている。
「ホナミ！テメェ！返事位はしゃがれ！」
「いきなりだなぁ・・・ホナミってのは今は話せないよ。」
「何だ！テメェ！」
「ヒント！道満！道満の娘！木津！今、何処でしょうか？」
「後、アンタの娘は今はこの状態」
ホナミとアカリが全裸で拘束された画像が送られる。
「お前ら娘たちをどうするんだ！」
「あ～此の金髪のビッチは海外のスプラッタムービー制作会社に売るよ。性病にユルマン、ジャンキー・・・客も取れねえし内臓も売れない。」
「黒髪の娘は中東に売るかな？処女だし高値で売れるよ！」
「貴様らタダで済まさんぞ！」
「へ～木津から聞いて無い？加須さん。俺等、裏甲賀衆の事は？あんたらの組織を壊滅させる事もできるんだせ！」
「何が裏甲賀だ！」
「ホイ！」
陳がスマホの画面を加須に見せた。
組織の本部事務所から黒煙と火の手が上がり消防が消火活動をしているところが画面に映される。
「お前らか！」
「さぁねぇ・・・ウチの組織の構成員は色々なトコにいるからねぇ・・・因みに今、爆発させたのが一番小さな爆弾。本部事務所、会長別宅、愛人宅等、色々な場所に仕掛けている。」
「目的は！何だ！」
「娘を一人、十億で売る。後、あんたが木津を使いウチの組織にチョッカイ掛けた慰謝料が五億・・・」

「計二十五億だな！あ！木津からは身体で払って貰ったから・・・木津の内臓と娘で十億だ！」
「ほら！木津の娘だよ！」
スマホの画像には丸刈りにされた女性の姿が映し出されていた。
両膝、両ひざが包帯に巻かれ陰毛剃り上げられ女の割れ目から赤い物が飛び出ていた。
「おゲッ！ゲッ！」
「オイオイ、吐くなよ！アンタの組からは精々出せて、十五億位だよな？娘の一人は売るしか無い！どっち売る？」
「まっまて！組織から金を借りる！」
「加須さん、それ無理・・・アンタ、無事でいられると思ってんの？」
「チロチロッチロ・・・」
「あ～あ！漏らした！おい、尿道に蓋しとけ！」
「イヤ！」
真っ白なパンツを降ろされ土手の陰毛も少ない綺麗な割れ目を指で分けるとピンクの小さなクリトリス、その下に小さな穴が見えチロッと尿を漏らしている。
「アン！痛っ！」
小さな穴に小さいこけし型の蓋をする。
「ウワ！この女も漏らした！」
ホナミは勢いよく尿を吹き出している。
「このクソ女！」
ホナミの尿道に赤いこけし型の蓋がされた。
「アッアズッ熱い！」
「そりゃ熱いわ！その蓋は乾燥させたジョロキアから作ったからな！尿の水分で尿道で膨れるんだよ！」
「何か決められ無さそうだな？加須さん。ウチで決めるが構わないか？」
「娘の処女の娘を貰うわ！海外でも高く売れるし裏動画でも稼げる

からな！」
「まて！アカリの分は払う！」
「じゃあ指定口座に今、振り込め！ネットバンクだからスグだろ？」
「ボス！入金確認出来ました」
「加須さん。コレから指定する場所に一人で来るように・・部下とされる人間がいた場合は取り引きは無し。この処女の娘も売り飛ばす。」
「分かった！何処だ！」
「アンタの娘のバイト先のコンビニの駐車場。黒のワゴン車！」
「分かった！」
「少し出掛ける！誰も来るな！」
「でも・・・」
「馬鹿野郎！ウチのシマで鉄砲玉に当たるか！後、コンビニの目付きの悪い奴らを退けろ！娘から言われたぞ！」
「へい！」
「コンビニ廻りにいる部下を車に乗せ本部に返した」
「コンコン！」
「ガラガラ！」
ワゴン車のドアが開く。
「娘は！」
「いるよ！」
全員、目出し帽に声はボイスチェンジャーで変えている。
のそっと車に入る加須が前の男に頭突きをしようとする。
「ガジッ」
頭を陳の隣の男に押さえられる。
元レスラーのジョー。
ジョーが指に力を入れる。
「ミチッミチッミチッ！」
「アギギギっ！」
「おい！殺すな！価値が下がる！」

「手枷と足枷をして猿轡！」
「まぁ～最後の抵抗も分からなくも無いが、此の娘は開放するよ。記憶を消す薬は使うがね。」
「おっさんと小便娘、本妻、木津の娘と嫁は今夜にでも海外だ！」
「其れまで寝ておきな！」
加須の首に注射が打たれる。
裸の娘にも注射が打たれる。
陳がスマホで電話をしだした。
「あ～関西〇〇会の杉さん？私です。加須の捕獲は完了しました。加須の組織は杉さんが片付けて下さい。」
「関東の組織にはワタシらが連絡します。」
「あ～分かった！」
杉は電話を切ると会長に連絡をした。
「加須の一件と関東とのこじらせは解決しました。加須の縄張りは私の預かりで宜しいですか？」
「構わん。加須は組織の金を持ち逃げして海外という事にしとけ！」
「五条さん、関西の件は押さえました。１５億と加須、加須の娘、加須の嫁の拉致。後、関西の組織と交渉も終わりワタシらと関西は無関係です。」
「拉致した奴等は今夜、１２時の船に乗せます。同行して向こうで仕事をしますので東京の拉致した人間は今夜、東京湾の１６埠頭、竜蘭丸に出向が５時なので乗せて貰えますか？」
「分かった！コチラもカエデと道満の娘は船に乗せる。」
「関東の組織にも連絡は入れる」
・・・・東南アジア魔窟編・・・
「ドルドルドルドルドル！」
「ブーッブーッ！」
夕方定刻通りに船は東京湾から出港した。
午前零時には大阪港に寄港する。

東京からの船にはカエデ、麗華が乗っている共に陳の腹心の井上も乗り込んでいる。
井上は初老の老人で杖をつき、黒いサングラスをしている。
「若！無事に持って来ました。」
「じゃあ、加須の娘を乗せるかぁ。寄港はフィリピン沖のチャッキーの島と上海。」
「チャッキーに任せるのですか？」
「南米の組織から連絡が有りご指名だよ！」
「ドクターからは？」
「カエデが梅毒に感染してます。」
「厄介だね。」
陳は少し考えて南米の組織に連絡をする。
「カエデもチャッキーの島に降ろす。日本人の女の需要が高いんだと。」
貨物コンテナが船に積まれた。
中には真っ裸の加須の娘と加須が入っている。
コンテナには空調設備が付き荷物は無事に目的地まで運ばれる。
船が南太平洋の島に碇を降ろす。
海から見たらジャングルだけの島には立派な停泊施設が備え付けられている。
海に伸びた桟橋には線路が引かれ無人貨物列車が繋がれている。
「船の荷物を降ろすぞ」
「チャッキー！久しぶり！若いメスを2匹、持って来たぜ。後、食料品やガソリン類だ！又、映像制作と配信は頼むよ！」
「オーケー！陳！何時も悪いな！」
「後、此のメスは病気だから体液には気をつけな」
「俺の後釜は見つけたよ。ジェイソンだ！勿論、映画から付けたよ。チェーンソーが好きなイカレた野郎だ！」
「病気、進行してるのか？」
「後、2年は大丈夫だがね・・・」

「物資が無くなったり必要なモノは俺か上海に言えよ！運び込むから！」
「最期迄にハリウッド女優、頼むわー」
「オマエの頼みなら何とかするよ！」
「じゃあな、チャッキー！」
「じゃあな、陳！」
船の荷物を貨物列車に載せ終わると船は桟橋から離れて行った。
程なく桟橋の貨物列車も動き出しジャングルに入っていった。
「ガコン！ガタガタッ！」
「ギギっぎ～ガタン！」
貨物の扉が四方、全開に成り檻がスポットライトに照らされる。
「眩しっ！」
頭に被せられた頭巾も外される。
「ヒッ！」
眼の前には天井から吊るされた鎖を乳房に巻かれている女。
鎖の先が尻の穴に刺さった女。
乳首に輪が付けられて繋がれた女が歩いている。
荷物を持つ女。
トレーに臓物を載せて歩く女。
男がカエデの前に来た。
「ふ～ん・・・梅毒ねぇ～荷物持ちにも出来ないし明日にでも撮影するか・・・」
ゴム手袋の手がカエデのＪカップ有る垂れた乳房に伸びる。
「ガチッ！ガチッ！」
「ヒギッ」
垂れた乳房とアバラの境界に手錠型の輪が掛けられた。
輪には鋸刃が付いている。
挟んだ乳房に輪が食い込んで行く。
「カチカチカチ・・」
輪が小さくなるにつれ乳房に鋸刃が食い込み血が滲む。

「アズ・・・」
「カラカラカラカラカラ」
「ヒギッイヤ！脚が浮く！」
「カラカラカラカラカラカラカラカラ」
「フギャー！イダイ！イダイ！イダイ！」
脚が浮き両乳房に食い込む輪っかに全体重がのしかかる。
腕は後手に縛られ天井からの鎖が両乳房をカエデの顔まで伸ばす。
「ほら！良く見ろ！お前の乳首だ！吊るされて乳房が赤黒く変色しているな！後、二時間で自然と体重負けて両乳房が身体から離れる。助けて欲しいか？」
「何でも言うこどぎく・・・」
「乳首、一つでフックが一つだ！」
「尻の穴でも前の穴でもフックを掛ければ体重は分散する」
「どっちを切る？切らなければ後、少しで両乳房は無くなるがな」
「ウィーン！ウィーン！ガチ！」
カエデは気付かなかったがホッケーのマスクをした男の隣に腕が左右に三機、付いたロボットが腕を動かしている。
腕の先にはカメラが付いていて其れがいたぶられているカエデを撮影している。
「右！切って！」
「わかった！」
「シャキン！」
干し葡萄のように変色した乳首が乳房から離れた。
「約束のフックだ！」
「前か後ろか？」
「フックは丸く無く平たくフックの内側には刃が付いている」
「後ろ！」
「釜の先のようなフックがカエデの尻の穴を裂きながら尻に入り込む」
「ギャー裂ける！裂ける！」

尻の穴を裂いたフックは尾てい骨で止まった。
「もう・・・やべて・・・」
「今から本番だよ」
宙に浮いているカエデの白い腹をメスでスッと撫でる。
「ギャ！」
白い膜を切ると腸が見える。
腸に釣り針を通し、もう片方の針には餌が付いている。
カエデの脚の下には水槽が置かれ銀色の小さな魚が動き廻る。
「ポチャン！」
餌を水槽に落とすとユラユラ落ちる餌に魚が食いついた。
針が魚に掛かり魚が水槽内を動き廻る。
「ずっずるずる・・・」
腸がゆっくりと腹から出て水槽に落ちる。
内臓に痛点が無い為、カエデは乳房の痛さと尻の穴を裂く痛さしか分かっていない。
「バシャバシャバシャ！」
水が掛かり自分の身体の異変にカエデは気付いた。
「イヤ～！」
身体の力が抜ける。
ビチャビチャと腸を引っ張る魚に合わせて身体が動く。
「ブツン」
乳房が千切れ水槽に落ちる。
「ブチブチ・・・ブツン！ドボン！」
大型魚用の水槽内にカエデが落ちる。
「バシャバシャバシャバシャバシャ」
魚が一層、跳ねる。
真っ赤な水面に黒い髪だけが浮いてくる。

殺戮島の激闘～ミランダの悲劇～

・・・ミランダとホナミ～

「ジェイソン！昨日、細い娘を撮影したんだって？」

「えへへっ！つい興奮してやったよ。」

「映像は？」

「う～んお前にしてはアッサリとやったな・・・」

「まぁ乳房が引き千切れるトコは良かったよ」

「今日はもう一人の女か？」

「あ～厄介な病気だから完全防備での作業だな。始末は火炎放射器で焼き払う」

「病気じゃ無かったら売れるんだがなぁ・・・仕方ない」

「ジェイソン！昼には撮影するよ」

「助手は・・・ミランダって同じ病気のヤツがいたなぁ拷問はそいつに任せよう。ジェイソンや俺達がやる事は無いし、白人女がアジア人を拷問は南米でウケるだろ」

「おい！Ａの１２番！ミランダに言って昼に檻から豚のマスクの女を撮影スタジオＳに連れて来い！」

ミランダは黒いマスクの下で今日が自分の最期の日と悟った。

「ガラガラガラガラ！ガシャン！」

「ほら！早く出なさい！糞豚！」

ホナミの頭には豚のマスクが被せられている。

ミランダはホナミの首に繋がれている鎖を引っ張る。

「誰が豚だよ！この腐れ外人が！」

流暢な英語でホナミは悪態を付く。

ミランダはマスクの中ではビックリしていたがスグに鎖を引きホナミを檻から引きずり出した。

「何なんだよ！ここは！ふざけんじゃねえぞ！」

手を後ろで縛られているが何とかミランダの尻を蹴ろうと脚を伸ばす。
「ほら！着いたぞ！豚！」
「うるせぇ！白豚！」
「ほぅ・・・・黄色い豚は英語が喋れるのか？病気じゃ無かったらなぁ・・・・」
「うるせぇ！出て来い！ウチのオヤジはなぁ！」
「六角型の金網のリングを囲っているモニターに電源が入る」
白髪頭の目がくり抜かれた頭だけが映し出される。
「ぅう！」
「お前のオヤジだなぁ！頭だけだ！」
「おい！黄色い豚！眼の前の女と勝負して勝ったらお前は生かしてやるよ！」
「同じくミランダ！眼の前の豚を調理したら助けてやるよ！」
「早く檻に入れ！」
「おい！ミランダ！手枷を外してやれ」
後ろ手で固定された手枷が解き放たれた瞬間、ホナミの裏拳がミランダの顔をおそったがミランダが手で受け止めた。
すかさずミランダの拳がホナミの腹に入るが避けて乳房を叩く。
重量級の乳房は脂肪のプロテクターと化している。
「おい！勝負は殴り合う事では無い！バーベキューデスマッチだ！相手の身体の肉を削いでも切り落としても良いから金串に刺しトレーに三本、乗せたら勝ち！相手の首を落とす行為は禁止！切り落としても良い部位は膝、肘より先。尻の肉。乳房！串に刺す順番は肉、野菜、肉、ソーセージだ！野菜の場所をソーセージでも構わない。」
「へっ！この女でバーベキューを作れって事だよな！」
「チャッキー！この女もミランダを格下に見てるよ。大した事、無いわなぁ」
「そうだね。強者同士なら相手の力量が分かるからね。」
実際にミランダは南米のマフィア組織のボスの情婦で有り南米のブ

ラジリアン柔術のチャンピオンでも有ったが対立組織にボスが殺されミランダは組織の男達の性の捌け口に成っていた。
組織の男達の中に病気の人間がいたので彼女はスプラッタムービーの女優にされる前に柔術のチャンピオンという話を聞いたチャッキーが其の組織から購入しデスマッチの処刑人に島で成った。
実際に島でデスマッチで倒した女は１０人以上で相手にはヨーロッパの女子プロレスラーもいた。
「ウィーン！ガチャン」
金網上に設置されたモニターが全て外に向く。
モニターの背面に設置されたカメラがミランダ、ホナミを映す。
「ビービービーン！」
元南米チャンピオンミランダ対ホナミの殺し合いが始まる。
ミランダの作戦ではホナミを転がせ関節を破壊した後に締め落とし解体と絵を書いていた。
「ズッズズッザッ！」
ホナミの足捌きが柔道に似ている。
手を見るとオープングローブを外し素手で両手を上げて構えている。
「おいおいおいおい・・・何か陳から聞いているか？」
「素人の真似事だろ？」
ホナミが素人で無い事はミランダがホナミを倒そうと脚にタックルに行った時に気付いた。
南米人でも小柄な体躯のミランダがホナミの脚を取ろうとした瞬間、ホナミは後ろに下がり的確にミランダの顔面に蹴りを入れた。
「ガフッ」
反対に起き上がった身体にタックルをしてミランダを倒し片腕でミランダの両手を握り地面に押し付けてもう片方の大きな手の平がミランダの右乳房を鷲づかみにすると一気に胸から引きずり剥がした。
「ギャーウガウガッ！」
冷静に引き千切った乳房を放り投げてスグにもう片方の乳房を鷲づかみにする。

「ギュッギギギッミチミチッ」
鷲づかみにして捻った乳房からミチミチと音が聞こえる。
ミランダは必死に鷲づかみをしている手を殴るがホナミには効かない。
「ミチミチッ・・・ブツン！」
「ギェーギャーギャー！」
ミランダの雄叫びがリングに響く。
「やかましい女だね！」
ホナミの手がミランダの顎を掴む。
「カコン！」
「オゴゴゴッ！」
顎が垂れ下がりミランダは口をダランと開け口からヨダレを垂らす。
「さぁて・・・乳はもぎ取ったから次は尻の肉を収穫しようか・・・・」
手早く肩の関節を外すと股関節も器用に外す。
「シャー！」
激痛に耐えられずミランダが失禁した。
「うわ！漏らした！」
「栓が必要だね！」
ホナミが巨躯を揺らしながらバーベキューセットの置いて有る場所に行きバーベキューのセットをミランダの身体の横に置く。
「アガッ！」
今迄、何人もバーベキューにした女が今日、自分がバーベキューにされる。
「ゴキン！カコン！」
自力でミランダが肩の関節を入れたがドスンと背中にホナミの巨躯が乗る。
「ゲハッ」
「何を自分で入れてんだよ！」
「ゴキン！ブチッ」

肩の関節を外して腕を捻った。
肩の腱を捩じ切ったので自力での肩の関節は嵌める事は無理な状態に成った。
「お仕置きだよ！」
漏らしたパンティをトングで摘みズルズルと降ろした。
ピンクの割れ目と茶色に縁取られた小陰唇が露わになる。
「たしか・・・ココが尿の穴」
小さな穴を見つけると穴より大きなウィンナーを穴にウィンナーの先を入れると一気に押し込んだ。
「アガガガッ！」
「ほら止まった！パシン！」
ミランダの尻を叩く。
尻に真っ赤なホナミの手形が残る。
「さぁて・・・尻の肉を引き千切って行くかね」
そう言うと片脚でミランダの太ももを押さえ、両手でミランダの尻の肉を鷲づかみにした。
ホナミの握力は指で硬貨を折り曲げる。
尻にホナミの指が食い込む。
「アガッガッ！」
「ミチミチッビッ！バリバリバリ！」
軽く座布団を持ち上げる感じで尻の肉が剥がれた。
「バリバリバリバリバリバリ！」
単純作業のようにミランダの尻の肉を剥がす。
ミランダの尻は真っ赤な跡を残し所々に白い骨が見える。
顎は外れ女の象徴の乳房と尻を失ったミランダは激痛のなか自分の身体を映すモニターに眼をやった。
モニターの先の世界中の変質者に自分が処分されている映像が配信されている。
何人もの男や女が自分の惨劇で興奮しているのだろう・・・
「早く・・・ゴロジデ・・・」

「いたぶるトコも無いしソロソロ、やるか！」
覆面に覆われたミランダの覆面を剥がす。
「ファサッ・・」
金髪の髪が垂れ下がり褐色の南米特有の彫りの深い顔にかかる。
「一瞬でやろうと思ったけどアンタ美人過ぎ！苦悶の顔でやったゲル！」
脚の関節を外されダランとした脚を持ち上げるとアソコが丸見えに成るように左右の脚を顔迄、持ち上げると手に結束バンドで固定した。
両肩、両股関節が外れたミランダは菱形でリングに寝転がる。
「アタシって硬貨を折ったり雑紙を引き千切ったりした事は有るんだけどニンゲンを引き裂いた事は無いんだよね～」
「ヌプリ！ヌプ！」
ホナミの指がミランダのアソコに一本、二本と小陰唇を掻き分け膣口から入る。
「あ！悲鳴、悲鳴！」
「カゴッ
ミランダの顎を入れる。
「助けて！何でもする！アナタの奴隷に成る」
「ふ～ん、何か教えろ！」
「アナタのアソコに爆弾を入れられている！」
「あ～コレか？自分で取ったよ」
ホナミの手に銀色のボールが入っていた。
「お前にも入ってるよな」
「ギャッ！」
ミランダのアソコに手を入れボール状のモノを取り出した。
其れを金網に投げる。
「バチッ！ドン！ドン！」
金網に電流が流れていたのだろう。
爆弾と接触し金網を吹き飛ばした。

「ブン！ブン！」
金網の上部に設置されたモニターが消えて行く。
「なんてこった！ジェイソン！ハンディカメラでミランダの処刑をとって来てくれ！」
ジェイソンがマスクを付けチェーンソーと自動小銃を持ち建物から出た。
金網内に入りカメラを構える。
「オー来たな仮面ブタ！シッカリとうつせよ！」
再びミランダの膣に指を差し込む。
強引にフィストファックされ膣口周りは裂けて血が滲んでいる。
「ふん！」
「グッ！」
「ノーヘルプ！ヘルプ！」
裂けて膣と尿道口が繋がりアリのとわたりも繋がる。
指を3本、左右の膣口にかける。
「は～フン！」
「ビチッブチブチブチブチブチブチブチブチ」
上は恥骨を通りヘソまで裂けて腸が見える。
ジェイソンは撮影に夢中に成っている。
太いホナミの腕が伸びミランダの腸を引きずりだしジェイソンに投げ付けた。
「ビチャ！」
「ウガ！」
眼に血が入ったジェイソンは辺り構わず自動小銃を撃つ。
ホナミはミランダの遺体を盾にジェイソンに近寄りバーベキューの串をジェイソンの自動小銃を持っている腕に突き刺す。
「ギャ！」
串を抜きチェーンソーを振り回すがホナミは自動小銃を手にしている。

「タタタッタタタタタタタタタタ」
ジェイソンに全弾命中しドスンとリングに倒れる。
「死にマネすんじゃねえよ！」
ジェイソンの首にチェーンソーの刃を当てエンジンをかけた。
「グアー！」
ジェイソンは必死にチェーンソーを止めようとするがもがいてチェーンソーを掴み、指がビチビチャとチェーンソーに切断される。
「嫌！イヤ！ジェイソンが殺られた！」
「チャッキーが焦る」
「お前達！あの女を倒せ！」
施設内の拷問好きな看守達が手に武器を持ち建物から出る。
「カチッ！」
オートから単発に自動小銃のスイッチを切り替える。
建物から5人の銃器を持った女達が出てくる。
巨躯の割に身軽なホナミは木の上に登り近づく女の頭に自動小銃の銃口の狙いを付けた。
「タン！」
女の頭を銃弾が貫く。
「ザン！」
木から飛び降り肉塊に成った女に近づくと女のズボンを脱がせ股に手を宛て膣に腕を入れた。
「ほら有ったわ。」
ぬちゃッとした手の平に銀のボールが握られている。
其れを建物の入り口に投げる。
「ドン！」
建物入り口の防犯用の電流網に当たり爆発する。
ズボンはジェイソンから剥がしたモノを履いている。
死体から防弾チョッキと銃弾、手榴弾を取り上げる。
「タン！タン！」
「駄目だ～来る～」

・・・・東南アジア某港の倉庫・・・・
「ピポパポン！ピポパポン！」
「おい！リュ！スマホを見てくれ！」
「アンオンオンアン！」
「パン！パン！パン！パン！」
女が髪を前後に揺らし垂れた乳房も前後に揺れ顔に当たる。
「ボス！チャッキーからＳ・Ｏ・Ｓです！」
「Ｓ・Ｏ・Ｓ？ヘルプじゃ無くか？」
チャッキーとの取決めでヘルプは食料、燃料等の普通のトラブル。
Ｓ・Ｏ・Ｓは敵の襲撃と取決めている。
「おい！モニターに島の様子を映せ！」
「アン！オンーアンアン！」
「へ～やるねぇ・・・島の兵隊は皆殺しかぁ」
ビデオを巻き戻し最初から見出す。
ミランダとの格闘シーン。
「へ～古武術かぁ・・・」
腰の動き早く成り、ホナミとミランダの殺られるシーンで陳が興奮する。
女の尻を払いベッドから落とす。
「も～なんなの！」
顔を上げた女の前にモニターが有りミランダの膣から裂かれるシーンが映し出される。
「ヒッ！」
「おい！リュ、加須の娘の捕獲は簡単だったか？」
ガウンを全裸の裸にかけて陳はリュ達のいる部屋に行った。
チャッキーが殺られて島が乗っ取られた。
船は暗証番号制だから脱出は出来ていない。
「う～ん、久し振りに下忍から中忍の昇忍試験、殺るかぁ」
「日本の五条達にも連絡して島を舞台に昇忍試験するぞ！ホナミを

殺した奴がワンランクアップだ！敵は1人だから1人ずつ各家から出す。」

「ウチの流派からは女郎蜘蛛を出せ！」

ホナミの過去と姪流

「分かったわ！ええ！」
「どうした一条！」
「加須の娘が南太平洋に有るチャッキーの島でチャッキーを殺し島を乗っ取ったて・・・・」
「へ～島の施設に細菌兵器が有っただろ？アレでヤれないのか？」
「陳が昇忍試験をするって！」
「へ～確かに５年は開催していないな？」
「陳のトコは女郎蜘蛛を出すって。」
「くノ一かぁ～確かに女を男で殺すのはな・・・・」
「お前のトコは？」
「ウチは望月朧を出すわ。あの娘も自分より大きい敵を倒さないとね。」
「へ～望月の名を持つ者をだすとはね。」
「一条は？」
「家も多羅尾の名を持つ者、出すよ。多羅尾千代・・・」
「小姓は？小姓こずえが出ると・・・」
「あのコ！あの娘、出すの？すぐ肉塊にするよ！」
「宗家は？」
「宗家は興味無いって！」
「甲賀姪家七家から一人ずつ出しても最初のくノ一で殺すだろ？」
「いや出すのは望月、多羅尾、如月、小姓の四家だけ。一人に全家は無いと頭から・・・」
「確かに古武術と軍事教練を受けた娘に全家は表甲賀に笑われるな」
「だとすれば四人、同時は無し？だよね。」
「一人、手、脚と時間内に一本を奪う。」
「最期は達磨にして放置。」

「望月は最期だろ?朧なら瞳術を使えるし」
「朧、今回が初何だよね・・・・アレって瞬間催眠術的なモノだから・・・・少し心配」
「見守り役で行けば?」
「アタシ?」
「頭も誰か行けって!もしもが有れば名を汚すから失敗したくノ一と加須の娘の殺害。」
その日の内に甲賀流が所有する自家用ジェットを使い南の島に向かった。
女郎蜘蛛は黒いドレスにベール。
望月朧は白いノースリーブのワンピースに黒いサングラス。
小姓こずえはリュックに短パンにTシャツ姿で背も低い事も有り子供に見える。
多羅尾千代はリュックにジーンズ、Tシャツ姿で大学生がバックパッカーをしているように見える。
一条は白いスーツ姿、各々が離れて歩いているので5人が仲間だとは思われない。
チャッキーがオーナーをしているホテルに一人ずつ入って行く。
「すみません。黒いハサミを貸して貰えますか?」
ホテルの受け付けでそう言うと受け付けの女が鍵を出す。
エレベーターに乗り込むと最上階のボタンを2回押す。
ガクン!エレベーターは存在しない地下に降りる。
地下は一部屋だけ有り部屋じゅうにモニター、無線機が置いて有り南太平洋支部の女が働いている。
千代、朧、こずえ、女郎蜘蛛は既に忍び装束に着替えている。
「深夜、出発!各自部屋で待機。食事はルームサービスで!」
「はっ!」
全員が上忍の一条に従う。
「カチャ!ガチャ!」
女郎蜘蛛が忍び装束を脱ぎ全裸に成る。

ベッドに横たわり脚を拡げる。
「アッ！」
女の秘所の割れ目に細長い管を入れる。
「あおっ！」
尻の穴からも管を入れる。
真っ白な裸体に糸のようなモノを巻き付ける。
肌に食い込む箇所が凹む。
手首から肘、足首から膝迄を念入りに巻く。
白い肌に何本も赤い線が見える。
下着も着けずに裸体に忍び装束を纏い腰に太刀を刺す。
「ガシュ！ガシュ！ガシュ！ガシュ！」
懸命に牛刀を研ぐのは小姓こずえ。
「ガッ！」
スグに携帯電話でクロークに電話をする。
「砥石と鮫革を持って来て！」
砥石が届く迄、クナイを小さなヤスリで削る。
朧は鏡台の前に座りサングラスを外すと眼に特殊コンタクトをはめる。
其の上に室内でもサングラスをかける。
後は忍び道具とハンドガンの手入れをしている。
「ブィ～ン！ギョン！ギョン！ギョン！」
「アッアッアッアッアッアッアッアッ！」
万千代が片手に電動マッサージ機、左手に大型の電動コケシを自分の秘所に入れ喘いでいる。
万千代の部屋だけ防音対策をしている。
夢色透明な愛液が白く白濁し泡を纏いながら出し入れしている電動コケシに纏わりつく。
餅のように固まった愛液がコケシの下部に集まる。
「はぁ～。」
愛液の餅状のモノを自分の膣に押し込む。

何回か繰り返すと下腹が少し膨らんで来た。
「あぅん！」
先が円錐型のディルドで蓋をする。
「はぁ～」
身体をタオルで拭き黒いブラウス状の布を身体に包み腰帯だけ巻き太刀を刺す。
下着は着けていないので胸の膨らみの先には勃起した乳首が布を押し上げている。
部屋の電話を取りルームサービスを頼む。
一条は先祖伝来の忍び装束に着替える途中。
ブラを外しチタン製の糸で編んだ布で作ったブラとパンティを履く。
手には手甲を着け、脚にも甲を着ける。
赤黒い忍び装束を着て長い髪を後で束ね結ぶ。
頭に頭巾を被り顔に鬼面を着ける。
黒い装束に歴代の敵、失敗した仲間、抜忍の血が染み込み赤黒く変色している。
腰に太刀を付けゴルフバッグを肩にかけると部屋を出る。
「コーヒーを・・・・・」
タブレットを取り出しチャッキーの島の銃火器の隠し場所をチェックし加須の娘の体術を見る。
・・・ホナミの過去と強さ・・・
ホナミは加須がロスの組織から貰った女子レスラーとの間に産まれた娘。
本妻との間には子は出来なかった。
ロスの女が育児放棄をしているとロスの組織から連絡を貰い加須が娘に会うとロスの裏町の不良を１２歳で束ねていた。
加須が半ば強引に日本に帰国させて家庭教師を雇ったが誰も半日も持たない。
悩んだ加須は知り合いの古武道の道場にホナミを預かる。
「凄くガタイが良いな！俺と試合するか！」

道場主は流暢な英語で話しかける。
「はん！其の小さな身体でアタシに勝てる？笑かせるな！」
「威勢だけは良いなぁ・・・来いよ！白豚！」
「白豚だぁ！殺してやる！」
「ほい！」
ホナミの身体が宙に浮く。
「ドカン！」
道場の板の間に倒される。
？白髪の小男だぞ！どうして投げられた？
ホナミは信じられないでいる。
数時間後、肩から息をするホナミと其れを見る白髪の男。
「何だよ・・・其の技は？」
「越後流古武術・・・う～ん言ったら昔の戦場で刀が無いときに相手を殺す技だよ。」
「刀のが強いじゃん！後、銃は？」
「銃ねぇ・・・」
「ほれモデルガンだ！中にはカラーペイン弾が入っている。其の玉が私に当たればお前の勝ちだ！」
ホナミが銃を道場主に向ける。
銃の扱いは慣れている。
「すっ」
男の腕が銃のスライド部分を掴み捻じる。
「ドスッ」
「え？」
「銃は近距離戦では使い物に成らない。」
「お！もう夜だ！飯の時間だ！」
「おい！お前も野菜ぐらい洗え！」
慣れない手付きでホナミは野菜を洗い料理の手伝いをした。
道場に布団を２つ敷き二人は寝た。
・・・おっさんなら溜まってるだろ！アタシのアソコで締めてや

るよ！・・・
そっと起きたホナミは全裸に成り道場主の布団を剥がしそっとパンツと道着を下げた。
中年の下半身が露わになる。
「立つのかな？」
白髪まじりの陰毛から男根が顔を覗かせている。
「カプっ」
・・・何だよ、普通サイズじゃ！！！・・・
グングンと男根が大きく太く成る。
「あがっあがっ！」
「何だよ下手くそ！」
「許してやるよ」
「ガハッ！ゲハッ！」
「オッサン！妖怪かよ！何だよ其のペニス！」
「馬鹿！俺は人間だよ！コレは房中術の一種だよ！」
「何だよ！其の房中術って！」
「男は女を女は男を性行為を使い操ったり性行為中に暗殺する術だよ」
「アタシにも教えてくれよ！」
「武術だけと聞いたけどなぁ・・・」
「ほれ！」
「カランカラン」
木のスリコギが転がってる。
「其のスリコギを膣で締めて1週間、落とすな。
特殊な塗装をしているから落ちたら分かるぞ。
其れを落とさなかったら教えて上げるよ」
翌日からホナミの奇妙な練習が始まる。
練習中は脚をモジモジさせて満足に動けない。
「ほら！何だ！」
道場主にタコ殴りにあう。

「オチんだよ！」
「じゃあケツの穴に力を入れ丹田、ヘソの下に気を集中させろ！膣にも力が入る」
「どうだ？締まっただろ？その態勢で撃ち込んでこい！」
ホナミと道場主の奇妙な生活が始まる。
「おっさん！一週間、耐えたぞ！」
「じゃあ！本格的に今日から房中術の訓練だ！」
「ホナミ！裸に成ってコッチにこい！」
「次は何だよオッサン！」
「今日から此のサボテンにぶら下がり寝ろ！」
「少し登れ。」
木の太い幹にＬ字型の棒が飛び出ている。
前方にはＬ字の先が尖った円錐型の張り型が二本。
下段には左右にＬ字型の棒は付いていない。
「ほら上段の棒を持て！懸垂のように上がれ」
前方の棒、二本は外している。
「こ・・これで良いのか？」
「はぅ！」
先の丸いＬ字の棒の上部を膣にいれてＬ字の下部を柱の穴に差し込む。
「おっ、オッサン！これで寝るのか？？」
「そうだ。力を抜いたら下の棒がお前の子宮を押し上げて激痛で目が覚める。コレで一週間、寝ろ」
「其の尖ったのは？？」
「コレが第一段階の試験だよ。駄目ならアソコは串刺し！」
練習が終わりクタクタの身体を川の水で洗い流す。
そのまま、寝床の有る小屋に入り最後の力を振り絞り懸垂をする。
「オッサン！位置に着いたぞ！」
道場主が部屋に入り円錐の張り型をホナミの膣穴に入れ柱の穴に下部の突起を固定する。

「寝ている時もアソコに力を入れろよ。力を抜くと子宮に突き刺さるぞ！」

「あっ！いたっ！」

最初の頃は何度も子宮を刺し眼を覚ます。

次第に寝た状態でも膣に力が入り身体の体重を膣が受け止める。

普通に睡眠が取れるように成り一週間が経過した。

「よし！此の訓練は終わり。」

「次はこれだ！」

籠の中に緑色の紐が蠢いている。

「蛇じゃねえか！オッサン！」

「此の蛇をアソコの膣圧だけで締め殺せ！」

「毒は？」

「此れはアオダイショウだから無毒だ。」

「これが出来ればヤマカガシ。少し毒が有る。最終はマムシ。猛毒だ。マムシを締め殺したら房中術の基礎は終わり」

「オッサンの趣味じゃねえよな！」

「馬鹿！女なんてのは何処にもいるよ！後、ウチの里では一五歳から出来るからな！負けるなよ！」

「ひっ！絡み付くよ！」

「胴体を持てば巻いて来るよ！頭を掴むんだよ！」

蛇の頭を持てば蛇はウネウネと胴体をくねらすだけで巻き付かない。

「ほら膣に押し込んで締め殺せ！」

覚悟を決め緑色の蛇の頭を摘む。

手には巻き付いて来ない。

ゆっくりと股の割れ目に近付ける。

陰毛は邪魔なので全て剃っている。

ピンクの亀裂を蛇の赤い舌がチョロチョロと舐める。

「くっ！」

訓練の成果で亀裂の開閉は自分の意思で出来る。

「ヌポッ」

「グッ゛」
蛇が驚き口を膣内で開ける。
毒が無くても膣壁を噛まれたら完治しにくい。
「フツん！」
「コキン！」
下腹分で骨が割れる音がなる。
「はぁ～」
「毎日、自分の意思で開閉出来るように訓練しろよ」
「後、今日から男遊び解禁だ！男の精を吸い取る訓練しろ！」
「小屋に服が有るので着替えて街に繰り出せ！」
「明日からは毒蛇のヤマカガシに変える。」
「セックスも今夜だけに成るかもしれんからな楽しめ！」
ホナミが小屋に入るとピッタリしたドレスが木の練習具に掛けられてる。
真っ白なドレス。
「何なんだよ！スケスケじゃねぇか！」
ドレスを着ると自分の身体の変化に気付いた。
無駄な脂肪が無くなり尻と胸にしか脂肪は付いていない。。
太腿はカモシカのように長く筋肉が程よく付いている。
手も皮下脂肪が無く筋肉の上に少しの皮下脂肪が乗っているだけ。
首はスラリと長く真っ白なドレスに大きな胸と尻だけが強調されている。
道場主の車を借り街に繰り出す。
馴染のクラブに入ると嘗ての舎弟や遊び仲間がナンパに声を掛ける。
あしらいながら、カウンターで飲んでいると筋肉質の黒人が声を掛けてきた。
・・・・・この男の精を吸い取ろうか・・・・・
「ハイ！一人なの飲む？」
そこそこに飲んだ二人は男の部屋に行った。
「ヘイ！好き者の女を捕まえたぜ！」

部屋には全身入れ墨の黒人が二人、部屋に居た。
部屋には甘い匂いが充満している。
「きゃー」
ホナミは驚くフリをする。
薄い生地のドレスは紙のように破れ床に散らばる。
「あごっ」
ペットボトル大の真っ黒なペニスを口に咥えさせられる。
「ふ～ふ～」
「おごごっ・・・・」
ズルズルとペニスがホナミの喉奥に入って行く。
根本まで黒人のペニスを咥えこむ。
「ヘイヘイ！」
「ペッ！」
掌にツバを吐きそのツバを自分のペニスに塗りたくる。
「メチっミチッ・・・」
濡れていない膣に無理に入ってくる。
「ふ～ふ～ふ～」
鼻で息をして房中術でアソコの全筋力を抜く。
「シッッ！」
余りの膣圧の無さに黒人はバシンとホナミの尻を叩く。
「ふ～ふ～ふん！」
「メチッミチッミチッミチッ！」
黒人のペニスが万力で挟まれたように、膣にホールドされてゆく。
まるで大きな手の男にペニスを握られている感覚。
「ノ！ノウ！ハナセ！」
ホナミの喉にペニスを咥えさせている男がナイフを手にホナミを刺そうとしている。
「ブズン！」
「ギャー！」
「オェ！ゲハッ！」

ホナミがペニスを吐き出す。
ホナミが尻を左右に揺らし横にゴロンと回転した。
「ブジッ」
「ギャー！」
膣に収まっていたペニスは膣圧と無理な横への回転で根元からもげた。
「ビッチ！」
三人目の男がバックの銃を取り出そうとしてる。
「スカン！」
泡を吹いて倒れて居る男のナイフを拳銃を持っていた黒人の頭に投げた。
「血で汚れたよ！」
真っ裸の肌に血痕が飛散ってる。
「よいしょ！」
立ち上げると股からペニスがズルズルと下ってきた。
大量のシャンプーを手のひらに載せて頭を洗う。
「はあ～湯があったけぇ」
どす黒い汚れと泡、血がシャワーで洗い流される。
「服はぁ～これとこれで良いわ」
男のジーパンを履き、裾はナイフで切って合わせた。
男のタンクトップだけだと寒いので黒人の男の革のジャンバーを羽織り、床に落ちている。財布と草の入ったカバンを持ち部屋から出ていく。
・・・河原、道場前・・・・
「キッ！」
一台のタクシーが止まり中から女が降りてくりる。
「オッサン！土産！」
袋に入れた牛タンのようなペニスと金を道場主に渡す。
「何人、殺した！？」
「３人！」

「硝煙の匂いがするな。銃を持っていたか？」
「あ～使った。３人を撃ったよ」
「しょうが無いなぁ、お前が持ってけ」
「後、ほれ！」
茶封筒に入った金を渡された。
「何？これ？」
「お前の取ってきた草を売ったんだよ。一週間もすれば捜査、始まるぞ！後、相手の組織も動くから海外逃亡資金だよ」
「一週間でこことも・・・・」
「だから最終試験」
男が竹編みの籠を持ってきた。
「マムシ、１０匹、絞め殺せ。」
「あ！噛まられたら生命は血清で助かるがアソコと下半身の膀胱、肛門の筋肉はオジャンだ！一生オムツだな。」
「ほら！始めろ！」
腰を降ろし股を開く。
「はぁ～はぁ・・・」
「ピッピッビロン」
ラフレシアの花が咲くようにビランと小陰唇が開く。
脇に置いた籠から一匹のマムシを取り出し頭を掴む。
ゆっくりとラフレシアの花の中央に有る膣にマムシの頭を近づける。
マムシはチロチロと赤い舌を出している。
一気にマムシを膣にいれ膣圧で殺さないとマムシが膣内で暴れ膣壁や子宮に噛み付く。
「はぁ～ふ～はっ！」
グワッと膣口が開く。
すぐさま膣にマムシを入れて下腹に力を込める。
「コキッコキッコキッ・・・」
マムシが動かなく成る。
最大限に拡げたら自分の拳は楽に入る。

「パコン！」
肉のラフレシアがパカッと開きズルズルとマムシが力無く地面に落ちる。
其れを酒瓶に入れる。
「ふ～うっ～はっ！」
「パカン！」
「はっ！」
マムシを膣に入れて膣圧で殺す。
殺したマムシを酒瓶にいれる。
「終わったよ～」
よろけながらホナミが小屋から出る。
「終わったな！」
「其処のナイフと私の書いた秘伝の書だ！後は自主練習と実戦。」
「其れを持ち今夜、小屋を出ろ！」
「何で！」
「今夜、襲撃される。」
「返り撃ちにしようよ！あたしも闘う！兵隊も呼ぶ！」
「駄目だ！お前ではスグに殺される。」
「お前の仲間もだ！」
「今日、襲撃に来るのはワシの実家からだ！」
「お前らには勝てん！だから逃げろ！」
「嫌だ！」
「オイ！飛丸！コイツを遠くに運んでくれ！」
「ドン！」
腹を殴られホナミは気絶した。
「すまんがホナミを逃がしお前も逃げろ！」
「師匠！」
・・・数時間後・・・
「げへっぐはっ！」
ホナミの傍らに黒装束に眼だけ出した女が座っている。

「師匠からお前にだ！」
真っ黒な鞘に入ったサバイバルナイフ
ホナミが鞘から抜くと真っ赤な刃が姿を現す。
「師匠からの遺言だ！教えを悪に使うな正義に使え。悪に使うとお前を殺しに仲間が来る・・」
「アタシは師匠の監視役だったから郷に帰る。絶対に悪事に力を使うなよ」
・・・南方の孤島・・・
小型ボートが島に近付くとサメの背びれが海面に増えて来た。
サーフボードに縛られた全裸の女の遺体も増えている。
「あ～ご丁寧に砂浜でバーベキューしてるよ」
「？あの赤い刃のサバイバルナイフ・・・如月の家宝の金剛斬じゃないか？」
「土蜘蛛！お前、如月玄蕃を監視していたな！ホナミは知っていたのか？」
「・・・ハッはい！」
「あなた達、下忍では彼女に勝つのは無理！アタシが行くわ。」
「この、一八代望月千代女が！」
「でも・・」
「五月蝿い！下忍が口出しするな！」
千代女が黒いコートを脱ぎ捨てると白い裸身に薄い絹をまとった全裸の望月千代女が手に鈴を持ちボートの舳先に立った。
「フワッ！フワッ！」
「死にたく無ければ眼を開けるな！」
土蜘蛛達に言い残し全裸に近い巫女は海に出ているサメのヒレをとん！とん！と飛びながらホナミの待つ砂浜に近付く。
海には大量のサメが蠢く。
黒い髪を後で束ね全裸に、薄い巫女衣装の女がトンと砂浜に着く。
「フッ！」
巫女の眼を目掛けホナミが針を吹く。

「カラララン！」
扇で叩くと全て砂浜に落ちる。
「やはり玄蕃から聴いていたか！」
「オマエの術は瞳術だろ！聴いてるよ！」
「バカが！」
眼の前の女が消える。
「何処！行った！出てこい！」
スッカリ日が沈み砂浜が静寂に包まれる。
沖のボートも無い。
「腹が減ったなぁ！飯にしよう。」
「眼の前に肉の塊が有る。」
ナイフを入れ肉を半分に割る。
実際はまだ夕方でホナミの傍らで千代女がホナミを見ている。
自分の乳房にナイフを突き刺さし削ぎ落とす。
その乳房をバーベキューの網に乗せる。
「ジュージューと乳房が焼ける」
「この肉も美味そうだ！」
自分の太腿の肉を切り落とす。
「ガブッ！」
自分の焼けた乳房に食らい付く。
「ヒュン！」
扇がホナミの首を左右に撫でた。
「ボン！」
首が飛び切り口から大量の血を噴き出す。
砂浜に乳房を咥えたホナミの首が転がる。
「お？」
「ビュン！」
「身代わりと分身は会得したか？」
「渡しも出来るがな・・・」
千代女の身体が分身し各分身がホナミの分身に付く。

ザクッ！斬！
斬られて分身が消えて行く。
千代女のスピードに付いて行けない。
「ガン！」
脚を蹴られ蹲る。
「婬流ももわり！」
「ザク！」
尻の割れ目に千代女の鉄扇の刃先がずぶりと埋まる。
「がっ！」
千代女の脚をホナミが握る。
「汚らわしいわ！」
真っ赤な刃がホナミの手首を切り裂く。「バゴーン！」
ホナミの身体が弾ける。
「へ～火遁まで習得ねぇ～」
「先に私の体臭を嗅いだ時に決まっておるわ！」
尻の鉄扇子を脚で踏み着けるとズズッズズッとホナミとの体内に沈み胸の位置まで割いて首を落とした。
「パン！」
幻術を解き船を浜に呼んだ。
「千代女さま！」
「やはりな！」
「土蜘蛛が裏切りか！」
「此奴の師匠が・・奴、だったわ」
飛丸が船室で腹を切っていた。
「ほら！ホナミの首だ！」
全く違う白人女の首に爆弾が口に咥えられている。
「ドン！」
船が爆炎に包まれ望月千代女は散った。
「やれたか？」
望月千代女が幻術使いで眼が見えないのも如月玄蕃からの書で分か

っていた。
ホナミは備えでサメを捕まえ肝油を身体に塗った女達を犠牲にし千代女を爆殺する作戦を取った。
・・・炎上するボートの沖合のクルーザー・・・
「やはり玄蕃が宝刀と忍び戸籍を渡したか・・」
「どうする！陳、私たちの術を見抜かれておるぞ！」
「アンタもあくどいね千代女さん。
下忍で試すなんて！」
「お前もな陳・・如月玄児！」
「何故、家宝と忍び戸籍を叔父に持ち出されたと言わぬ！」
「望月はこの件には関わらぬ！如月でカタをつけろ！」
「ガチャ！」
「ホナミが玄蕃叔父の弟子とはねぇ・・・」
「地下発電を止めて、飲料水に毒、後・・・大気に放射線で一ヶ月かな？」
一月後、陳は島に部下を連れ乗り込んだ。
島の熱帯雨林は枯れコンクリートの建物だけが砂丘の上に建っている。
生物は死に絶え、散乱した骨に蟹が数匹真っ白な骨に真っ赤な蟹の甲羅が奇妙なコントラストを描いている。
「アグっ」
「シュゴーゴゴゴゴゴゴゴッ！」
一月経っても生きている者もいる。
全て火炎放射器で焼いて行く。
「がっ！ぐげ！」
「オイオイ、驚いたな！お前、生きていたか？」
「お前が師匠をヤッたのか！」
「抜忍、家宝の泥棒、甲賀婬流の秘伝書を持ち出し血族でない奴に見せただけでも重罪だわ！オマケにバカに婬流を教えて・・・・」
「バカが婬流をつかい子供相手に悪さだ・・・悪さに使うなと叔父

から聞かなかったか？」
「取り敢えず死んどけ！」
「如月流、無限糸！」
ホナミの身体に無数の赤い線が走る。
「クンッ」
「バラバラバラバラバラバラバラバラバラバラ」
ホナミの身体は小間切れに成った。
「頭！金剛刀です。」
「俺は戻るからお前達は掃除をしていけ！来月から又、メスの製造工場として稼働させる。」
波の上をトントントンと飛び石のように飛びクルーザーに乗り込んだ。
金剛刀の取り返しと亜流を抹殺した事で少しは他家に顔向け出来ると陳は思っていた。

十六代杉谷善住坊～くノ一無情。

「ガーン！ゴン！ガーン！ゴン！」
山に鉄を撃つ金槌の音が木霊する。
九州鹿児島山中に有る刀鍛冶の郷。
陳は家宝の金剛刀と脇差しを鍛冶屋に預けていた。
元来、金剛刀は相手の刀を圧し折り相手を斬る刀。
ナイフと化した金剛刀を太刀に直さないといけない。
ナイフ二対と脇差しで長刀にして貰えるように鍛冶屋に頼んでいた。
「ガン！ガガン！」
「カン！」
金槌を振り下ろすたびに乳房がブルンと波打つ。
「ガン！ブルン！ガン！ブルン！」
「オヤジ！この弟子は志願か房中術か？」
「志願して来ぬわ！房中で博多の大学から連れて来たわ！」
「アン！」
「ヤケドで喘いでいるよ」
身体中に赤いヤケドが小さく有る。
股の陰毛は熱で縮れている。
もう一人の女の陰毛は無くなりパイパンに成っている。
「のけ！」
「ガン！ガン！ガン！ガン！ガン！」
「ジュ！」
木の桶から真っ白い湯気が湧き立つ。
真っ赤な長刀が刀鍛治の手に握られている。
「試し突きをする！持って来い！」
虚ろな眼にザンバラな髪、所々にヤケドの跡の女が裸に褌姿の女に

連れて来られる。
虚ろな眼の女は褌では無く荒縄でマワシのように股間を隠している。
「オイ！」
刀鍛治の男の前に四つん這いにされる。
真っ赤な刀の刃先が女の股間に当てられる。
「ズッズズ！」
「はぅあ～」
藁を突き刺し真っ赤な刃先はズブズブと女の股間に入って行く。
「ハグッ」
女の身体を貫き女の口から赤い刃先が出てくる。
赤い刃先には血は付いていない。
股間を貫き膣から子宮、内臓を貫き心臓も貫いているのに女の目はトロンと成っている。
まるで男根に貫かれイッタ表情をしている。
「ズッズズ」
男が刀を抜く。
血は付いていない。
藁にも血が滲んでいない。
「如月の頭よ！出来たわ！金剛の長刀が！」
「オヤジ、ご苦労さま・・・トコロで小姓のカシラは来ているの？」
「んぁ？こずえか・・・玩具を二人、連れて行ったわ。」
「三兄弟で下のこずえが一番、残忍だからなぁ・・・アレが善住坊の慟哭か？」
「あぁ、大ノコギリのような形にザンバラな刃先。一切りで傷口はグチャグチャよ！」
「で、切り過ぎて刃先が整ったら打ち直しをする。ヌシの金剛刀が無痛の刀ならアレは苦痛の刀よ！」
「杉谷一族も無残に殺られたからのぅ
一族の男は磔刑、女は股をノコギリ引き・・
男は直ぐに行くが女よ！竹製のノコギリで股をノコギリ引きされて

も中々死なぬ。
首をノコギリ引きされる杉谷善住坊の前で奴の妻、娘がノコギリ引きよ！
夜に下郎どもが奴の妻や娘の腹に穴を開け内臓でイキよった。
奴の前で娘も妻も腹の傷が致命傷で亡くなり、股には鎌が刺さっていた。」
「小姓・・・杉谷の子は・・・・」
「加賀の前田が匿った子が信長亡き後、甲賀で杉谷を名乗った。その子が二代目杉谷善住坊」
「今の杉谷善住坊は？こずえか？」
「如月の！余り他家には興味無いか？
こずえは双子の姉・・・かずえが当代の杉谷善住坊だ！あの慟哭はこずえが使ったモノだな。」
「よくわかるな。こずえとウチの土蜘蛛がやり合った時の傷だ！」
「其れを望月がとめたと・・・・」
「かずえなら一発で仕留めているわ」
「望月千代女以外は幻術にかかっているぞ！」
「かずえなら術をかけられたら首と股に激痛が走り術には掛からん」
「善住坊のノコギリ引きの傷と一族の女達の股の傷か？」
「術をかけられたら激痛でかずえは幻術は破る。そして銃で一発よ！」
「？オヤジ、小姓の家にいる娘は？」
「あれはこずえの影じゃ！」
「オヤジ、小姓かずえは？」
「あ～慟哭を渡して狩りをしとるわ」
「まだ来るのか？風魔が？」
「シツコイぞ！ヤツら！今日もハイキングの服装で十人は来とるわ」
「加勢は？」
「いらぬわ！如月のぅ、かずえに殺されるぞ！」
「ターン！ターン！」

「ほれ四人は脚を止めたわ」
「ターン！パン！パン！ターン！ターン！」
「全員の脚を撃って止めたわ」
「二・三日掛けて遊ぶじゃろ！
夜に成ると泣くぞ」
「おい！慟哭を置け！」
筋骨隆々の女が二人掛かりでも慟哭は動かない。
「フン！」
刀鍛治が慟哭を持ち金床に置いた。
「主らはザンギリの刃だけを叩け！」
真っ赤な炉に慟哭を刀鍛治が入れる。
吹いごで風を炉に送るとクジラ型の刃が真っ赤になる。
「フン！」
炉から引き出し金床に置くと大金槌で慟哭を打つ！
「ガイン！ガン！ガン！ガイン！ガン」
刀鍛治と弟子が慟哭の本体と刃先を交互に打つ。
・・・竹籔・・・・
「ほら相棒の股をノコギリで引いたら生き残る事、出来るぞ！」
女が二人、バツの字の磔台に縛られ
一人は上から下を向いている女の股に錆びたノコギリの刃を当て、
逆さまにされた女も対極にいる女の股に錆びたノコギリの刃を当てている。
「ガン！お前、逆さまだから早く切らないと先にお前が死ぬぞ。頭に血が下がり鼻から血が出てるぞ！」
「ヒッ！」
ノコギリの錆びた刃が股に付いているビラビラした肉のヒダを前後に延ばす。
「ギヒェ！」
肉ヒダが千切れて血を流す。
「この！」

ノコギリを引こうとした瞬間にグルンと磔台が回転する。
「ヒャ！」
鼻血を　流し眼が真っ赤な女がノコギリを懸命に引く。
「ぎゃ！ギェ！ヒギャ！」
肉ヒダをちぎりノコギリの刃はアリの門渡りを前後に引くが・・・
「あぎゃ！」
逆さに成っている女が苦痛に耐えてノコギリを引く。
「このクソオンナ！」
「ギェー！」
上を向いた女は優位性を無くし激痛に耐える。
「グルン！」
また磔台が回転する。
「一気に殺してやるわ！」
「おい！次はお前達だ！」
裸の女が四人、固まりガタガタと震えている。
「男は面白く無い・・直ぐに自害する」
「おい！おまえら直ぐに死か徐々に死か選べ！」
かずえは肩のライフルでトントンと肩を叩いた。
・・・股をノコギリ引きなんて嫌だわ。ライフルで一気に・・・・
二人、手を上げた。
「よし！お前らは来い！」
「え？銃では？」
「誰が銃と言った！兎に角、来い！」
製材所に着くと製材所の鍵を開けた。
「ギシッギギギガラガラガラ」
製材所の中には丸太を切る大型のノコギリが製材所の真ん中に置いて有る。
「ひぇ！嫌です？！」
「アタシも嫌！」
「めんどくさいなぁ」

「お前、尻をコッチに向けて四つん這いになれ！」
「オイ！お前は騒ぐなよ！」
ハンドソーの前後に可動するノコギリ刃に男性用の張り型を差し込む。
それにタップりとローションを塗ると女の膣に差し込む。
「ウィン！ウィン！ウィン！」
張り型が女の膣を前後に動く。
まるでピストン運動かの如く。
「あ～アン！アン！アン！アン！」
膣から透明な婬液が溢れ、白濁して行く。
「ギヒッ！」
白濁した婬液に真っ赤なモノが混じる。
「ウィン！ヴィン！ガシン！ガシン！ガガガ！」
「あごごごごご」
「ガガガガガガガガガガガガ」
膣から恥骨、下腹部とノコギリの刃は腹を切り裂く。
「ズッズズズ」
切り口から大腸や腸が溢れ出す。
「快楽の後の地獄の苦しみよ」
「で！お前はどうする？あのノコギリも古いから途中で止まるかも知れない。お前の運次第だ！嫌なら快楽の後に地獄の苦しみのコレでするか？」
「ガガガガガガガガガガガガ！」
鋭いノコギリの刃が前後に高速で動く。
「・・・あの・・大きなノコギリで・・・」　女は少しでも助かる方を選んだ。
「ほら！丸太に乗れ！左右の脚を丸太を通して拡げさせて縛るから」
「ほら手を上げて！」
「バシッと垂れた乳房を叩く」
股を開いた型で丸太に固定され丸太はノコギリに続くベルトコンベ

アに固定される。
「じゃあな！」
かずえが丸太切断用の大型ノコギリの電源ボタンを押す。
「ギュイーン！イーン！」
段々と音が小さくなる。
「あ！先日、ノコギリの整備とモーターとノコギリ刃の交換していたわ！ごめんね！」
「イヤー！嘘つき！嘘つき！」
「コーン」
丸太に振動が伝わる。
顔にオガクズが掛かる。。
「チュン！」
「ハグッ！」
女の股に当たった高速の刃は肉ヒダ、クリトリスを弾き飛ばし刃は股から真っ二つに女を割いて行く。
「シュシュシュシュシュシュシュシュ」
骨が切断される音がする．。
音に合わせて血飛沫が舞う。
「ギュイーン・・・ン」
自動的に機械が止まる。
ガコン真っ二つに割れた女の断面が丸太に付いている。
赤と骨の白が妙な幾何学模様に見える。
「バシャバシャバシャ」
「はぁ～疲れた！お前ら、くノ一にしては体重が有り過ぎ。木渡も出来ないだろ？ノコギリ引きの二人は・・・流石にヘソ迄、切れば死ぬか・・・」
「お前ら来い！」
首に繋げた紐の先の手榴弾を岩の間から抜くと紐を繋げたピンを手榴弾から抜き川に投げ捨てる。
「ドガーン！」

川から水柱が上がりピチャピチャと女達に掛かる。
「ヒッ！」
首の紐を引っ張る。
「歩かないと紐に埋めたヘアワイヤーが首を飛ばすぞ！」
かずえが紐を引っ張った途端に首にチクッと針のような痛さが走る。
二人は竹藪に連れて来られた。
もうすぐ日が沈む。
「コレが良いかな？」
「オイ！この若竹の先をア・ソ・コに入れて立て」
少し腰を下ろした所に筍から若竹に成ったばかりの竹が有る。
「ほら跨って竹の先をアソコに入れろ」
女は従い竹の先をアソコにムププっと刺す。
「あっいたっ」
小さな笹が小陰唇を触り竹の先の葉が膣壁に当たる。
「動くなよ！」
立たせた女の後ろに杭を刺す。
「ドン！ズブズブ！ガン！ガン！ガン！」
杭は地面に刺さり動かない。
首には未だワイヤー入りの紐が巻いている。
かずえは女の廻りを越しに刺したナタで堀り数珠のようなモノをぐるりと埋めた。
「コレ、特殊な対人地雷。赤外線付きだから跨いだら爆発。度胸が有るなら逃げな。後ろの杭と繋いだ腰紐は忍びなら抜けるだろ」
首の紐は解けて別の紐が腰と杭を繋いでいる。
「度胸、有るなら逃げな！」
「失敗したらアレだけどな！」
竹藪に所々に窪みがある。
「色んな、くノ一が来たが逃げれた奴はいないよ。大人しくしてれば明日には死ねるよ。今夜は雨だからなぁ」
その夜は、かずえの言った通りに深夜に雨が降った。

夜までは捕まった、くノ一同士で話していたが何時のまにか立って寝ていた。
竹が膣奥を付くのにも慣れ足の撃たれた傷も疼かない。
翌日は朝日で起きるより先に膣奥の子宮を突き上げる鈍痛で眼が覚めた。
燦々と日が竹籔を覆う。
「グッグッグッグッ」
・・・・え!?急に竹が成長、仕出した。
昼前にはつま先立ちをしないと踵を着けば子宮口を突き子宮内に入る。
「あきゃ!ぐぇ!」
同じような状態で拘束されていたくノ一の脇腹から若竹が腹を破り突き出ている。
「ぎぎぎ・・・・・」
腹の痛みを堪え奥歯に有る薬を噛んだが死ねない。
脚にも銃で撃たれた傷も無い。
・・・・アノ女に会った時から術に嵌っていた・・・
昼には腹を突き破った竹が伸びつられて身体も浮いている。
懸命につま先立ちしていた女も竹の先が子宮口を貫き子宮奥の壁を突いている。
「イヤ!こんな死に方!イヤ!」
奥歯を自分で噛み砕き吹いた!
「フッ!」
「カッン!」
地雷は爆発しない。
「いや〜」
気力も無くなり力が抜け踵が地面に着くと腹からブズブズブと音が聴こえた。
「あがががが・・・・」
モコモコと下腹、腹、と女体の中の竹の先は内臓を突き破って上に

上がる。
反対に女がズルズルと尻を下げる。
「アゴッ」
女を貫通して口から竹が出る。
女は眼を向いて絶命している。
「お～上手く三十体目の吊るしの竹が出来たわ。」
真っ直ぐに伸びた竹の先に女の尻と脚が見える。
「腐って落ちて動物の餌に成る・・エコだねぇ」
飄々とかずえは刀鍛治の小屋に戻る。

牛蔵の遊び

「シュッ！シュルシュルシュル！ギュッ！」
「アッ痛！」
桃香のはち切れんばかりの大きな胸の乳房の根元にシルク製の縄が巻き付いて乳房を縛る。
四つん這いの形で宙に浮いた桃香の乳房は重力で垂れて水風船に水を入れたように成っている。
「ギュッ、ギュッ！」
「フグッフグッ！」
痛いと口から出たが口を白い布で縛られている。
「ウィーン！ウィーン！ウィーン」
「眩しっ」
床ばかり見ていたがウィンチで脚が降ろされ周りが分かるように成った。
真っ白な部屋に裸の女性ばかりが精肉加工工場の肉塊のように天井から吊るされている。
桃香の前に裸の女性が三人が吊されて等間隔で横に三人、前に三列、計九人。
桃香の横に等間隔で三人。
後ろは分からない。
横に並んだ二人は桃香と同じように乳房の付け根を縛られて天井から吊るされている。
「え！カナピさん？」
一番端に有名コスプレイヤーの女性が縛られて天井から吊るされている。
小顔と同じ大きいな乳房が縛られて膨らんでいる。
カナピさん行方不明と聞いたけど捕まっていたのね。

「ウィウィウィウィ」
ランダムに天井のウィンチが作動して吊られた女体が下がり苦痛の顔から普通の安堵の顔に成る。
カナピが横の桃香の視線に気付き顔を向ける。
童顔、垂れ目で目の下に泣きボクロ。
髪は短いが何時もウィッグなので外されているようだがKカップコスプレイヤーでグラビアやイベント、テレビと活躍しているカナピ。
・・・拉致されてたんだ・・・
「ウィウィウィウィウィ」
「はぐっ！」
桃香の天井のウィンチが作動した。
「ウィウィウィ・・・」
「ギュッギュッギュッギュッ」
「ハギッ！ガハッ！い・・息が・・」
胸に激痛が走り乳房が鬱血してくる。
桃香の眼の前には鬱血して赤い乳房と先に有る小さな乳首がピコッと立っている。
「ギチギチ・・ギチギチ・・」
つま先立ちでやっと吊られた状態でも耐えれる。
「ウィーーーーン！」
「ぎゃ！いゃー！」
桃香の左にいた髪を金髪に染めた女が急に騒ぎ出した。
女の天井に付けられたウィンチが音を出して回転しだす。
女の乳房を縛るリボン状のシルクの紐がウィンチに引っ張られて乳房を締め付けて行く。
Jカップは有る乳房が砲弾の用に形を変え乳房が水平に成り乳房の色が赤く成る。
「助けて！イヤ！」
顔が桃香に向く。
・・あ！この女の人、爆乳セクシー女優のウララだ！・・・

「ウィーーーーン」
縛られた乳房がウィンチで上に上がる。
ウララの顔の前に自分の赤黒く腫れた乳房が見える。
「ウィーンウィーンウィーン」
もう二本、天井からフック状のモノが降りて来る。
女の前と後ろにフックが降りる。
フックは鉤針の先に金属の玉が付いている。
「いだ！」
何時の間にか小さな子供がウララの尻を左右に拡げ鉤針を尻の穴と膣穴に突き刺している。
リボン紐で縛られた乳房と尻のフック
膣に差し込まれたフックでウララの身体を吊り上げて行く。
「お尻痛い！お〇〇〇痛い！オチチイタイ！痛い！痛い！痛い！」
天井近くまで上がると小さく破裂音が鳴った。
「パン！」
左乳房が萎んで行く。
ズリズリ・・ズルッ！
ドスン！
ウララが天井から落ちて来た。
左乳房から乳白色の液体が滲み出ている。
右の乳房は根元から無い。
赤い乳房の跡が胸に有る。
尻の穴は裂けて膣穴も原型を留めていない。
ウララはビクビクと痙攣している。
首が、くの字に曲がっている。
「やっぱり偽のおっぱいだね。」
「そうだね」
「うぐうっ！ぐぅ！」
「喧しいな！オマエ！」
「パン！」

「はぐっ！」
桃香の尻に紅い痣が浮かぶ。
「ねぇアダム！この子、吊るす？」
「い！」
桃香が首を振る。
「怯えた目が笑える！コイツ、吊るそう！」
「ウィーーーーン」
天井の滑車から鉤針が付いたフックが降りてくる。
前のフックを膣にいれようと小さな手が桃香の大陰唇を拡げてフックを押し込む。
フックの先を膣穴に入れると抵抗が有る。
小さな手が桃香の大陰唇を拡げて指を膣穴に入れて掻き回す。
「いっいっ！」
「イブ！この子、バージン！未経験！」
「未経験！処女！おぼこ！」
キャッキャと子供達が飛び跳ねる。
真っ白い頭巾のモノが桃香に近づいてくる。
「お前は別室だ！」
声は機械で変えている。
尻の下に車椅子が用意されると天井のウィンチが作動し桃香の体が車椅子に降りて来る。
尻が車椅子の座面の皮に当たる。
ヒヤリとしたが子供が脚を持ち上げ車椅子の肘掛けに乗せた。
「ギチギチ」
肘掛けと太腿が固定される。
股を拡げ秘所をさらけ出し椅子に乗せた車椅子を子供がキュルキュルっと音を立てながら押して行く。
「ウィーーーーン」
「ハギッ！」
違う女が天井に引き上げられる。

・・・新宿歌舞伎町外れ五条事務所・・・
「先生！先生！依頼！」
ドカドカとスカートの短い制服の女達が五条探偵事務所に入って来た。
「先生！桃香、探して！」
「ちょっと待て！一から喋ろ！」
「この子！伊藤桃香！アタシのツレ何だけど拐われた！」
「拐われた？誘拐なら警察だろ？」
「新宿署が取り扱わないんだって！」
新宿界隈、特に歌舞伎町では若い女が拉致され拐われる事は日常、起きている。
大体がホストに貢ぎ過ぎて売り掛けを蹴り逃げた時にケツモチの反社に拐われ風俗や海外に売られるパターン。
警察も家出や拉致だけでは動かない。
「後、巨乳の子ばかり拐われる」
テーブルにパサッと写真を置く。
学生から社会人、水商売、タレント、地下アイドル、メイドカフェと多岐にわたる。
共通は確かに胸の豊満な子ばかり。
「サチは拐われる心配は無いな・・・」
「真面目に聞けよ！オヤジ！」
「賑やかだなぁ、五条にぃ！」
「お～こずえ、来てたのか？」
ショートカットの髪を金髪に染めた童顔のこずえが階段から降りて来た。
「デカッ！」
こずえの胸を見たサチが思わず呟く。上半身、シャツのこずえの胸はスイカのように盛り上がっている。
「こずえ！オマエ、胸のサイズ幾つだ？」
「にぃ、聞き方有るだろ？アタシを見て興奮したか？」

「違うわ！今、巨乳の子ばかりの拉致が有ってな、こずえに協力を頼むトコだよ」
「一応、Ｊカップだけど？」
「オマエ、拉致されてくれ！」
「は？五条のおっさん！行き成り何？」
五条は経緯を話した。
サチ以外にも依頼は来ていた件なので若いこずえに頼んだ。
「仕方無いなぁ。で、何処で拉致されんだ？」
「オマエ、コスプレしてくれ！」
「サチ、制服、有るか？」
「後、ウィッグはそのロッカーに有るから！」
「おっさん！着替えるから出てくれよ！」
「あ、あ、出るよ。」
事務所から出てビル入り口でタバコを吹かしていると一条が降りて来た。
「あら？珍しいわね。喘ぎ声じゃ無く黄色い声が聞こえるなんて！未成年は駄目よ。捕まるわよ。」
「おっさん！出来たぜ！」
こずえが事務所の中から五条を呼ぶ。「あら！こずえ！来てたの？って、アナタにコスプレの趣味が有るとはね」
「あ！一条さん、ご無沙汰してます。これ、お！五条さんからの依頼で・・・」
「こずえ！一条は敬語で俺はおっさんかよ！」
一条に失踪事件の事を話した。
「成る程ね・・巨乳だから、こずえねぇ～」
「まぁ良いわ。こずえしか適任はいないし小姓の兄達には私から話しとく。後、新宿署のこの方、陳の配下だから失踪した場所の防犯カメラを見せて貰いなさい。」
……新宿署地下…
「新宿〇〇ホテル角の防犯カメラ、午後五時ぐらい！…」

「あ！ここ、この学生を追って」
一人の制服姿の学生がホテル角を右に曲がる。
残暑は残るが日が落ちるのが早く成ってる。
キキキッ！
「ガラガラガラガラ…」
ワゴン車のサイドがスライドして数人の目出し帽が制服姿の女性を車に押し込みドアを閉める。
「ここ！止めて！このワゴンのドアに有る紋章アップして！」
黒い車体に金色で蓮の花の紋様に梵字が書かれてる。
「聖母心教会」
「厄介な教団に当たったなぁ…」
心霊商法、終末思想、スピリチュアル、自然回帰の何でもアリの新興宗教…
最近では信者の家族も拉致紛いの方法で入信させてる。
厄介なのは宗教の顧問に政治家が成っている事。
政権与党の副幹事長のトキタが顧問をしてる。
トキタは警察畑からの転身組。
聖母心教団には警察も手が出せない。
「女性数十人が拉致をされても動かない訳だ…」
「ブブッブブブッ」
「あ！オッサン！後から黒いワゴンが付いて来てるけど捕まったら良いの？」
こずえから連絡が有った。
「大丈夫か？オマエ？」
「オッサン！アタシも裏甲賀の人間だぜ！大丈夫だよ！じゃあな！」
「ブッ！」
「たのしんでんな…」
「あ！一条か？こずえが予定通りに拐われた。ソッチでＧＰＳで追えるか？」
「見てるわ。首都高に乗ったわね。東名高速に向かってる。」

車内では、こずえが全裸にされ身に付けたアクセサリーやヘアピン迄、全て外されていた。
「フグッ！」
尻の穴に肛門拡張機を入れられペンライトで照らされ調べられてる。
「ファ！」
ペリカン口の器具が膣に入れられ拡げられる。
ＧＰＳ発信器でも探しているのだろう。
「ひぁ！」
腹にジェルを塗られ其処にエコーを当てられる。
「内臓には無い」
こずえに付けられたＧＰＳは尾てい骨に付けられている。尾てい骨の発信機には電圧を上げる作用も有りＧＰＳに触れると電流が脊髄神経に流れる。
脳機能も壊れるので秘密保持には必須になっているしＧＰＳ発信機迄、見つかるヘマな忍びは要らないと考えられている。
「ビビビッ！ビビビッ！」
「え？！」
こずえの座っている座席の後ろの席でエコーから警報音が流れている。
「おい！コイツ、乳房に何か仕込んでいる！」
…鈍臭い！日本の公安か、警察官か？…
「牛蔵！捻りだせ！」
「オデ二マガゼロ！」
牛蔵の掌からはみ出す程の乳房を牛蔵の掌が摘みもう片方の手が乳首を摘むとギュッと人差し指と親指で摘み力任せに引っ張った。
「ブズッ」
「ふんぐ～」
女が曇った悲鳴をあげる。
乳房に真っ赤な穴が空いている。

「ズブッズブッズブッ」
左右の人差し指を穴に差し込むと左右に力を入れ乳房を割いて行く。
「こで！」
牛蔵の指に小さなカプセルが有る。
「牛蔵！後、ケツアナ！次に全ての穴を探せ！」
「アイ！」
女が尻を突き出す形で抑え込まれる。
「ブスッ！ズブ！」
「ビチッ」
「ふぎ～！」
女が暴れこずえとの間のカーテンが開く。
女の尻に肘まで入った腕と白目を向く女。
乳房は裂けてカタチが無い。
尻の上、下腹部がボコン！ボコン！と上下する。
「尻にはねえ！」
大きく空いた尻の穴のうえの膣口に左右の指を入れ拡げる。
「ビビビッビリビリ！」
簡単に膣が裂けて子宮口が見える。
股には大きい穴が一つだけ見える。
牛蔵が内臓を掴みだす。
探知機を探すでは無く女の解体作業。
「キッ」
「牛蔵！その女を谷に落とせ！」
山奥の橋の上から元女だった肉塊を落とす。
「この女！チビってる！」
「この女もだ！」
車には肉塊にされた女の他にこずえともう一人が乗せられていた。
…アタシは漏れたんじゃ無く濡れたけど…騙せた。
ワゴン車は深い山道をどんどんと進んで行った。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n0466jf/

淫の軍団～甲賀流房中術婬奇譚～

2025年7月29日02時19分発行